真・三国志妹
俺の妹が邢道栄に転生するはずがない

春日みかげ

ファンタジア文庫

2686

口絵・本文イラスト　をん

目次

第一回　俺の妹が邢道栄に転生するはずがない　8
第二回　俺の妹が邢道栄に転生してしまったんだが……　25
第三回　読んでますよ、ホビットさん。～決戦のゆくえ～　118
第四回　オーロラの降る夜　わたしは祈るの　168
第五回　虎牢関の蒼天を翔けよ　237
あとがき　347

十二月下旬、クリスマス・イブの夜。
雪が舞い降る大通りの中へ、妹を乗せたその車は走り去っていった。
地元の病院ではもうどうしようもなくなっていた妹の重病を治すために。
生まれつき、病弱な妹だった。いつこの夜空に舞い降る雪のように消えてしまうかもわからない、はかなげな俺の家族だった。黒髪が美しい俺の妹は、物静かで、優しくて、愛らしかった。
兄なのに。ただの子供でなにもできない自分が、歯がゆかった。
それまで、ろくに口をきくこともできなかった。妹と親しくすればするほど、妹を失った時の喪失感が大きくなりそうで、怖かった。兄としての優しい言葉とか妹を励ます言葉とか、そういう恥ずかしい台詞を吐くのが酷く照れくさかった。
だが、いざ妹が去ってしまう時が来て、俺は後悔した。俺はただ、俺の心を護っていただけだ。俺自身が傷つきたくなかっただけだ。だから、妹と距離を取ってきたんだ。
一縷の望みを懸け母に付き添われ東京の大病院へと転院していく妹へ向かって、俺は自分の足で追いかけながら、叫んでいた。中二病乙と言われようが、黒歴史になろうが、この先の人生でこの夜の俺の台詞を思いだすたびにゴロゴロと床の上を転がることになろうが、構わない。

「俺は――いつかきっとお前を護れる兄になる！　必要ならば天才ドクターにだって、世界を救う英雄にだって、俺はなるから！　お前に、約束する――！」
それは、俺が生まれてはじめて自分を「俺」と呼んだ瞬間だった。
車の窓越しに、掌をガラスに押しつけて俺のほうを見つめていた妹の小さな声が、聞こえたような気がした。唇の動きで、言葉を読みとることができた。
「ありがとう。兄さん」

きっとまた会えると、その時は信じていた。
年が明けて。
奇跡的に治療に成功したという一報が舞い込んできて、俺は天に祈りたい気持ちになった。
だが、それきり音信が途絶えた。
母さんと妹は、二度と俺たちの「家」には戻ってこなかった。
理由はすぐにわかった。
転院先の担当医と、母さんが、唐突に恋に堕ちて再婚したという。そう。妹が転院すると決まった時に、すでに両親は離婚していたのだ。

あのクリスマスの夜から、俺は少しだけ大人になっていた。両親が離婚したことを咎められるほど子供ではなかった。父さんの気持ちも、母さんの気持ちも、わかる。ただ、俺の妹は、俺の妹ではなくなった。それでもいい。この同じ世界の夜空の下で生きていてくれるのならば。ただ、できることならばもういちどだけ、元気になった妹と太陽の下で再会してみたい、と願った。

そして。その願いは、四月に。新学期の季節に。少しだけ微妙なかたちで叶った。

「……ごめんなさい。ごめんなさい。いぢめないで……」

俺の家に、新しい「妹」がやってきた。

俺の父さんもまた、再婚したのだ。そして新しい義理の母親が、「妹」を連れてきたのだった。

小顔なのに目がぱちっと大きい、やせっぽちの新しい「妹」は、俺に怯えきっていた。

当たり前だ、と思った。暮らしたこともない土地に、知らない家に、血が繋がらない父親と兄のもとに、急に連れてこられたのだ。しかもここに至るまでの事情は、かなり込み入っている。が、そんなことはこの「妹」には関係のないことだ。そうとも。大人の事情

というやつだ。俺と「妹」には、関係ない。

だから、俺は新しい「妹」の頭をそっと撫でながら、兄妹の「誓い」の儀式を実行していた。

「泣くな、俺の妹よ。血の繋がりなど、関係ない。この俺がお前を、兄として護ってやる！必要ならば天才シェフにだって、世界を救う英雄にだって、なんにだってなってやるとお前に約束する！」

ほんとうはもっと普通の優しい言葉をかけてあげたかったのに、初対面の「妹」がやたらとかわいいのであまりにも照れくさくて、気が利いた言葉が浮かばなかった。そのつもりはなかったが、俺はクリスマスの夜に口走っていた中二病乙な黒歴史台詞をまたしても叫んでしまったのだった。「ドクター」が「シェフ」に差し替えになったのは、「妹」が横浜名物の豚まんの包みを抱きしめていたからだ。たぶん、横浜暮らしのわが家に早く馴染みたかったから、だろう。

「妹」は、泣き止んでくれた。

「……あ……お兄……ちゃん」

それどころか、なにかたいせつな宝石でも見つけたかのように、嬉しそうに笑ってくれた。

第一回　俺の妹が邪道栄に転生するはずがない

それから、七年後――。

俺はいろいろあって、「真世界」と呼ばれる古代三国志世界に酷似した異世界に召喚され、なんだかんだあってそのまま定住していた。

「いろいろあって」の「いろいろ」については、ほんとうにいろいろあったので、とても一言では説明できん。

ともあれ、今の俺は真世界最大最高の「霊山」と呼ばれる泰山の麓の村に世界初の本格四川料理店となる「関張飯店」一号店をオープンして、「商人ルート」をまっしぐらに突き進んでいたのだった。

西暦二世紀頃の古代中国とほぼ同レベルの文明を持つこの世界には、四川料理の根幹となる香辛料「唐辛子」が存在しなかった。そして俺たちは、いくらでもこの唐辛子を錬成することができる！　当然、来る客来る客が次々と唐辛子中毒に陥って、もうやめられない抜けられない。店は連日大入り満員である。

オープン前の試食会で麻婆豆腐を食わされて「辛いです……！　豆腐は好きだけど……！」「厠が、厠が地獄になるううう！」と悶絶させられ、半信半疑で俺の「関張飯店」に出資した商人たちも今やすっかりほくほく顔で、「もっともっと銭を借りてください劉備さま！」「二号店、三号店と関張飯店の支店をガンガン広げましょう！」「投資は惜しみませんぞ！」「うちならば利息をここまで下げます！」と掌を返し、俺に銭を貸そう貸そうと押しかけてくる。

儲かるっ……！　いくらでも儲かるっ……！　「金は低いところから高いところへと流れる」とはよく言ったもの！　「銭が銭を生む」とは、まさにこのこと！　「SANGOKU大戦争モバイル」のガチャを回しすぎて月々のケータイの支払いに苦しんでいた高校生時代の俺とは、まるで別人っ……！

今の俺はまさしく、そう、「食の軍師」……！

料理店立ち上げに成功した最大の要因は俺自身の「人徳」であるが、それだけではない。なんといっても、わが優秀なる二人の妹のおかげだ。フハハハハ！

ジャーン、ジャーン、と盛大に銅鑼を鳴らしながら、俺はステージ上に立ち、「関羽さまあああ！　ふつくしい……！」「張飛たーん！　オリを鞭でぶって罵ってくれよーう！」と熱狂している常連客の独身男どもへ向けて得意のアジ演説を開始していた。

この世界は黄巾賊の乱のために世情が不安定なせいか、独身男子があぶれているのだ。

こいつらは、なんというか、世界線の枠を超えて、気が合う連中だった。俺も年齢イコール彼女いない歴というシャイボーイだからな。い、いや、俺は単に「兄貴道」を追求して妹を護ることで忙しかったから、彼女を作っている暇がなかっただけなのだがな！　りりりりリア充になろうと思えば、いいいいいつだってなれたのだぞっ！　嘘じゃないっ！　ちくしょう、それなのにどうして、関張飯店に押しかけてくるこいつらとこんなにも気が合うのだ……！

「関張飯店へようこそッ！　今宵は毎週恒例の『関帝たんナイト』だっ！　関張飯店を支える常連客の諸君！　わが愚妹の関羽と張飛に、今宵はチャイナドレス姿のコスプレを強要させた！　さあさあ、ステージにいちばん近い最前列の席に座りたい者は千金の銭を積みあげるがいい！　これより席取りオークションだっ！　いちばんの大金を投じた真の関張飯店サポーターには、関羽・張飛との握手券を一枚進呈しようッ！　こいつらは超がつくほどお堅いから、握手券をゲットできる機会は未来永劫ないかもしれんぞっ！　おーっと、ここで本日最高額の入札が来たーっ！　が、まだだっ……！　来たっ……！　倍プッシュ……！」

「「「ざわ……ざわ……!!」」」

まあ、入札価格をつりあげて最終的に握手券を落札するのは、二人の妹たちの兄であるこの俺なのだがな。すでにサクラを仕込んであるのだ。フハハハハ！　最高価格の握手券を超高額で自社買いすることで、こいつらが準備してきた「銭」が全額浮く。その分、じゃんじゃんと他のグッズに注ぎ込んでくれる。しかも握手券が超高額につりあがっている状態からの入札スタートだから、みんなイケイケドンドンで相場は青天井だ。

いや、まあ、俺以外の男と握手などさせようとしたら「妹をなんだと思っているのですか兄さんは！」「この妹使いの女衒っ！」と激怒した妹たちに殺されかねないので、妹たちの純潔を死守するためにやむを得ずこのような仕掛けを施しているだけで、決して常連客の野郎どもから銭を巻きあげるために悪巧みしたのではないぞ？

「それでは関張飯店が誇る二大妹！　まずは長妹・関羽雲長の入場だーっ！　全国各地の関帝廟に祀られている関帝たんの等身大フィギュアを拝み続けてきた関羽ファンの諸君、彼女こそがわが長妹！　真世界史上最高人気を誇るアイドル！　美と武と商売の女神さま！　正真正銘、ほんものの生身の関羽雲長である！　ほんものはフィギュアの百万倍美しいぞ、その黒髪のつややかなこと！　フハハハハ！」

まさに「美髪公女」。長い黒髪と睫、平常時は雪のように真っ白いが照れたり怒ったりすると真っ赤になる肌、そしてわがJK妹とは思えぬけしからん胸の育ちっぷり……真世

界全土で美の女神として崇められている関帝たんの美しさは伊達じゃない！　だが。
「……に、兄さん。ちゃ、チャイナドレスって、えっちだと思います……に、に、兄さんが『見たい』というのでしたら雪乃はどんな恥ずかしい格好だって……す、す、スク水だって体操服とブルマだってメイド服だって着ますけど、あ、あ、あくまでもそういう恥ずかしい姿を兄さんにお見せするのは二人きりで閨で添い寝している時限定です……ひ、ひ、人前では……う、う、ううう」
　生真面目でお堅い雪乃は照れてしまって、ステージにあがってこようとしない。
「こら、マナー違反だぞ。客がいる公の場で『雪乃』と真名を名乗るな雪乃！　じゃなかった、関羽！　この真世界ではお前は関羽雲長なのだからな、フハハハハ！　まあ、俺も公の場で妹の真名を呼んでしまう癖がなかなか抜けんのだが。いいから出てこいっ！」
「……あん」
「「「ぎゃあああ！　目が、目がああああ！　バルスううううう！」」」
　この世界には俺さまが召喚されるまで「チャイナドレス」が存在しなかったので、この雪乃のフィギュア体型とも言うべきボディラインを強調するドレス姿は野郎どもには強烈すぎたかもしれん。
　ショックのあまり死人が出るとまずいので、美と武の女神・関羽の美しさにあてられて

悶絶したらいっせいに自分の目を指で覆って「バルス」と叫べ、それで貴様らの魂は浄化され救われるであろう、ととりあえず関張飯店では教えてある。
　黄巾賊が暴れまわり、漢王朝の命運が絶たれようとしているこの乱世。この国の民が美と武と商売の女神・関羽を崇めること、母親を求める赤子の如しなのだ。一文無しだった俺がこの怪しげな「関張飯店」一号店の出資金を短期間のうちにしかも無担保で集められたのも、俺の妹・関羽こと雪乃が「商売の女神」も兼ねていて、商人どもに熱烈に崇拝されていたからなのだ。
　関羽の美に惑っている野郎どもは、その手にめいめい「手持ち関羽フィギュア」を握りしめて「関羽さまああああ！」と叫びつつ、いっせいに手持ちフィギュアを振った。中に蠟燭が入っているので、ペンライトのように光るのだ。この光る手持ち関羽フィギュアの特許も俺が取ってある。魔除けの唐辛子ペンダントと光る手持ち関羽フィギュア。この二つのアイテムだけで、莫大な収入になるのだ。
　もっとも、さらなる「大物」の関帝廟と等身大関羽フィギュアは、俺が召喚される以前からすでにあちこちに建てられていたので、そっちからのアガリは微々たるものだがな。許劭というこの村に住み着いている眼鏡野郎に命じて、「元祖本家関羽さまに無断で商売をされては困るねえ」とドサ回りをやらせ、多少はアガリをいただいている。

ククク……まだだ……まだ稼げるっ……逃さないっ……！　骨までしゃぶり尽くすっ……！　これがクール・ジャパンが生みだした最終商売奥義、アイドル商法っ……！　こいつら常連客はいつ死ぬかわからんこの乱世に不安を感じており、関羽の美しさによって魂の救済を得られる。俺は銭を荒稼ぎして「商人ルート」を邁進し、最速で真世界最大の商人となってこの真世界を救う！　互いにウィン＝ウィンなのだからいっこうに構わんっ！

「に、兄さん。いくら大義のためとはいえ、こんな地下アイドルのような真似を実の妹にやらせるなんて、げ、外道だと思います。ゆ、雪乃は、兄さんのご命令でしたらなんでも従います……ど、どんな恥ずかしいプレイでも、兄さんと二人きりでしたら、甘んじて享受します……で、でも、こういうのは……も、もしかして、兄さんはＮＴＲ好きなのですか？　それとも露出調教マニアなのですか？　あうう……」

「そんな属性は俺にはない！　だが、この田舎村の関張飯店に人を集めるには、全国レベルで高まっている関羽人気に乗っかるしかないのだから、あとしばらく。いま一歩の支援を願いたい、雪乃！　このままでは真世界がもたん時が来ているのだ！　かくして関張飯店がこの真世界の救済を果たしたその時、わが魂は諸葛孔明のもとに召されるであろう！」

「……は、はいっ！　なんだかよくわかりませんが、かっこいいです素敵です兄さんっ！　わかりましたっ！　今宵はステージ上で、ななちゃんと一緒に歌って踊ります！」

ななちゃんじゃなくて、張飛、な。俺たち兄妹はどうも互いを「英傑名」で呼ぶ習慣が身につかないんだよなあ。営業中の関張飯店は「公の場」なので、家族同士といえどもほんとうは英傑名で呼び合わねばならんのだ。

「さて諸君っ！　お待たせしたな！　わが末妹の張飛の入場だーっ！　この真世界に激辛という名の究極の快楽をもたらした香辛料にして、絶大な魔除けの力を持つ奇跡の食材『唐辛子』を錬成する『食神』！　伝説の料理人っ！　ロリ顔のくせにおっぱいのでかさは豚まん級だ！　武もバストも関羽に匹敵する、うちの自慢の妹だ！　知力は低いがな、フハハハハ！」

「こらっアニキ！　関羽入場時の煽りと、扱いがちがーう！　あたしにも『美』とか『女神』とか使ってよー！　『おっぱいのでかさは豚まん級』ってなによう！　あたしはスレンダーだよっ！　あと、あたしの胸のほうがゆきのんより1センチほど大きいよっ！」

口さえつぐんでいればリア充ＪＫモデル級のかわいい系美少女だが、口を開くと体育会系っ子特有のアホが露呈する俺の二人目の妹。チャイナドレスを着込んだ那波こと張飛が、包丁を手にしたままステージに登ってきた。那波は料理担当なので、さっきまで調理場で豚まんを仕込んでいたのだ。ええい。危ないから包丁は下ろせ！

横浜に引っ越してきて以来すっかり好物となった豚まんの味を、那波はもともと身につ

けていたお料理の腕前と張飛の固有スキルを用いて見事に再現してみせる。なんといっても、唐辛子を錬成できるというのがこいつの最大の強みだ。たとえ関羽人気で集客できても、肝心の料理が駄目では関張飯店にリピーターはつかなかった。しかし、唐辛子を用いた四川料理の中毒性は異常。今や、全国各地から命がけで「聖地巡礼」と称して那波の激辛麻婆豆腐を食いに来る熱烈なリピーターが大量発生しているのである。ついには、黄巾賊から巡礼者の身を守るための「関張飯店巡礼ルート防衛団」なる職業傭兵どもまで出現する始末。あれだな。十字軍巡礼が流行った頃のテンプル騎士団みたいな連中だな。

「ななちゃん。そんなはずはありません。兄さんは、大きな胸の妹がお好きなんです！ ですから、その兄さんの期待に応えるべく毎日牛乳をたくさん飲んでいる私のほうが少しだけ大きいはずです！ なぜなら、私の兄さん愛の力は全宇宙一。誰にも勝るからです！」

「えー。ゆきのんの胸は、前に突き出したロケット形だから大きく見えるんだよっ！ ボリュームと重さではあたしのほうが上だからっ！」

「そ、そんなはずはありませんっ！ お客さんさえいなければ、この場でチャイナドレスを脱ぎっこして兄さんに直接判定していただいて、決着をつけられますのに、ううう」

「実の兄におっぱい見せようとするなっ！ 油断も隙もないんだからっ！ あたしは義理の妹だから、べ、べ、別に見られても構わないけどさあ……？ あ、あ、アニキと血が繋

がっていないってハンディにも、め、め、メリットはあるんだよねー。け、け、結婚だってできるしぃ」

「な、な、なにを言いだすのですかっ！ 兄さんが私以外の妹と結婚だなんて。いくらななちゃんでも、断じて許しませんよっ！」

キター！ 劉備の旦那を巡って、今宵も姉妹の戦いがはじまったあああ！ たまんねええ！ これって異世界語でブラコンって言うのよね！ と、野郎どもはなぜか大盛りあがりしている。

雪乃と那波にヘンな噂が立ったら兄としても不本意だし、店の経営基盤が揺らぐので、「関張飯店の二大アイドル、関羽と張飛は『恋愛禁止』で『処女保証』だから、きみたちは安心して全財産を注ぎ込んで二人を応援してくれたまえ！ きみたちのその投資、決して無駄にはせんぞフハハハハ！ この劉備玄徳を信じろ！」とこいつらには日頃言い聞かせてはあるが、二人が兄を奪い合うのは別枠なのか？

まあ、この俺も庶民の男どもからは「劉備の旦那ああああ！」「あんたは、俺たちの最後の希望だあああ！」「漢王朝の復興は旦那に任せたあああ！」と熱烈に懐かれているので、それもあるのかもしれん。なにしろ劉備玄徳は庶民にとって永遠の英雄にして人気者だからな、フハハハハ！ なにもしなくても、フハハハと高笑いしていれば大人物だと思

われて無条件で庶民に好かれる。それが劉備玄徳として生きる者の定め！

もっとも、僕は劉備玄徳として「封神」されただけの、ただの男子高校生。つまりはパチモノなんだけどね。はあ。正直、24時間ずっとこのハイテンションな中二キャラを続けるのはちょっと疲れるなあ……あと、汗臭い野郎どもに囲まれてちやほやされる日々はどうにも暑苦しいよ。たまには、ええと、女の子にもモテたいかな……店に来る女の子たちは、だいたい関羽ファンか張飛ファンなんだよね。

……あっ、素に戻っちゃった。いけない、いけない。いちど素に戻ると日頃の自分の言動の痛さが倍返しで襲ってきて「うあああああ」と悶えることになるから、中二病兄貴のキャラを貫き通さなくちゃあね。じゃなかった、貫かねばならんのだ！

「ゆきのんっ！　あたしがゆきのんに勝ってるところって、おっぱいのサイズだけなのにい！　知力！　お上品さ！　真世界での知名度！　ななななにもかもあたしに勝っていながら、唯一の売りまで奪おうなんて……ぐぬぬ。アニキをゆきのんみたいな頭おかしいブラコンに独占させないんだから！　そこまで言うなら、脱がせてやる～！　勝負だーっ！」

「ややややめてください、ななちゃんっ！　チャイナドレスをステージ上で脱がさないでくださいっ！　もしかして酔ってるんですかっ!?」

「酔ってませーんっ！　あたしはいつでもナチュラルハイだよっ！」

「よけい悪いですっ！」

「こら、お前ら！　関張飯店では関羽、張飛と呼び合えと言っているだろうに！　ステージ上！　ステージ上！」

劉備の旦那ああああ！　妹にモテるねえええ！　あんた最高の店長だあああああ！　と、野郎どもは完全にできあがって大盛りあがりである。が、ほんとうに二人を脱がせるわけにはいかん！　たとえ事故でもステージ上でポロリさせてしまったら、一大事だ！　兄として、妹の純潔を護らねば！　この妹たちのオンステージだって、ほんとうはやらせたくはないのだ。きょ、きょ、巨乳の妹二人に、ステージ上で、ちゃ、ちゃ、チャイナドレスを着せたくはないのだ。俺がふんどし姿になったほうがウケるのなら、そっちの道を選んでも俺は構わんっ！　しかし、今の俺たちにはどうしても急いで大量の銭を稼がねばならん理由があるのだ……！

とにかく！

「妹」は！　すべてに優先するぜ！

「劉備の旦那が姉妹ゲンカに割って入ったあああああ！」

「ここから、『兄さんのせいですっ』『アニキのばかああ！　シスコンっ！』と切れた妹たちに旦那が袋だたきにされて足蹴にされる展開だあーっ！」

「張飛ちゃんの伝家の宝刀、『燕踵落とし』が劉備の旦那に決まったあああああ！」
「旦那が倒れたあああああ！」
「きっと見えてる！　あの角度！　旦那からは絶対に張飛ちゃんのチャイナドレスの奥の下着が見えてる！」
「むしろ下着を穿いていない可能性も！　ご褒美、羨ましいっ！」
「本気を出せば世界最強の英雄なのに、妹たちには徹底して無抵抗ッ！　さすがは劉備の旦那！　そこに痺れる憧れるうっ！」
「関張飯店に栄光あれえええ！」

俺は庶民の野郎どもから、「世界最強の英雄」「真世界を滅亡から救うまことの救世主」「漢王室の末裔にして筵を売って暮らしてきた、偉大なる庶民派の王者」「今は関張飯店で遊んでいるが」「いつか本気出して黄巾賊と亜人を退治してくれる」「漢王朝再建は旦那に任せた！」と熱烈に支持されているのだが、すまんが俺は商人ルートから逸れるつもりはないのだ。俺にはたいした武力とかないしな。むしろ、劉備玄徳だというだけでどうしてそういうふうに見られて崇められるのか、さっぱりわからん。那波が「食神」扱いされているのは、神の食材・唐辛子をこの世界にもたらしたのだから理解できるし、雪乃が美の女神として崇拝されるのは、まあ、美しいんだから当然だが……。

ともあれ、週にいちどの「関帝たんナイト」は狂乱のうちにつつがなく終了。

閉店後、俺はもはや常連客を通り越してすっかり俺の「子分」たちになった顔なじみの野郎どもと徹夜で飲み明かし、気がつけばぶっ倒れて寝台の上に寝かされていた。

子分たちはみな帰ったらしい。関張飯店の二大看板娘、関羽・張飛としてのステージ仕事と調理仕事を終えた雪乃と那波が、俺を介抱していた。どっちが俺の膝枕係をやるかで揉めていて、肝心の俺が放置されているのは問題だと思うが……あと、もうチャイナドレス姿はいいぞ。二人の太股がちらちら見えて、俺の「兄貴道」が揺らいでしまう。兄貴道は正義の道、光の道！　あ、兄たるもの、妹にいやらしい感情など抱いてはならんのだ！

「むにゅ、むにゅっ!!」

って、お前たち？　待て。取っ組み合いのケンカはやめろ、互いの胸で俺の頭を挟むな！　兄を窒息死させる気か！　し、しかも、俺の頭を奪い合いながら、俺のステータスウィンドウを勝手に開いて個人データを覗き見するなっ！　い、いや、別にエロ動画配信サイトに繋がっているわけでもないし、見られて困るデータなどないが、兄にもプライバシーというものがだな……。こら、那波。ウィンドウの階層を深掘りするな！

この真世界の封神英傑が抱える最大の問題は、個人データが頭の背後に浮かびあがるス

テータスウィンドウに表示されてしまうことだな。こいつが開きっぱなしだと邪魔になるので普段は閉じているんだが、なにしろロックできないからな。指紋認証くらい導入してくれよ。真世界の個人情報セキュリティはガバガバ。

「あ――――っ!? これって！ け、け、結婚コマンドだあああああー！」

俺の頭を膝に載せ、勝手に俺のデータを覗き見してわくてかしていた那波が、素っ頓狂な声をあげていた。結婚コマンドだと？ そんなものがあったのか？

「そっかあ。この真世界でも結婚できるんだねっ！ って、人間の世界なんだから当たり前かあ！ べべべ別にあたしは、アニキと結婚したくなんてないけどぉ！ 実の妹のゆきのんが暴走してアニキが兄妹婚の冥府魔道に堕ちちゃうくらいなら、あたしがアニキをいっただきいいい！ ぽちっ！」

「って、こらーっ那波っ!? お前まで兄妹婚の冥府魔道に堕ちてどうするっ!? ツンデレ妹のキャラはどーしたっ？ ブレてるぞ！ 乗りと勢いだけで行動するんじゃないっ！」

「あれ起きてたのアニキ？ 誰がツンデレ妹よう。あたしは義妹なんだから、問題ないじゃーん。べ、別に、アニキと結婚したいわけじゃないんだから勘違いしないでよぉ？ あ、あくまでもアニキを頭おかしいブラコンのゆきのんから護るためで……って、あ、あれれ？ 登録拒否されちゃったよう？ なんでえええええ？」

いきなり姉妹の信頼関係を破棄するかのような抜け駆けを喰らい、怒って那波を槍で刺すのかと思いきや、意外に落ち着き払っていた雪乃が「くすっ」と苦笑いを浮かべていた。

「ななちゃん？ 私たち三人はすでに『義兄妹』の絆を結んでいますよね？ 義兄妹の絆と夫婦の絆は、同じ英傑間では重複できないんです。惜しいことに、どちらか一方しか結べないんですよ。それに、真世界では殿方は妻を三人まで持てますから、たとえななちゃんが抜け駆けして兄さんの奥さんになったとしても、私も強引に絆チェンジして兄さんのお嫁さんになりますから♪」

「え、えええ？ じゅじゅじゅじゅ重婚アリなのっ？ 三人嫁って、完全にハーレムじゃんっ？ うわ～真世界ってほんとに異世界なんだねアニキ～」

「まあ、俺たちの世界でも国によっては重婚アリだしな。文化の違いってやつだ。だが三人の嫁なんぞ修道士のように清らかな生活を送ってきた俺には厄介だな、扱いきれん」

「ケッ。アニキは修道士じゃなくて、リア充になりそこなったただの陰キャじゃん」

「……だいじょうぶですよ兄さん。私が兄さんのおそばに侍っている限り、私以外の女には絶対にこの結婚コマンドは押させません。そんな邪悪な女狐が現れたら、その時は遠慮なく関羽雲長の武力98を用いさせていただきますから……ふふっ。ななちゃんは、今回だけは見逃してあげます……わ、わ、私の、か、かわいい、い、い、妹ですものね……」

「ひぃ？　アニキぃ。ゆきのんの視線が怖いよう！」
「に、兄さん！　わ、私の処女は必ず兄さんに捧げますから！　あ、あ、赤ちゃんの名前ももう決めてあります！　最低でも三人は産みたいです！　関平、関興、関索です！」
「ああもう。いったいなに言ってんのさ～！　ゆきのん、やっぱり頭おかしいよ！」
ううむ。那波と雪乃が紆余曲折を経て結んだ義姉妹の仲を引き裂きかねないな、結婚コマンドは。このコマンドの取り扱いには、以後、用心せねばなるまい。
もっとも、俺は当面、妻を持つ予定などないのだがな。なにしろ、二人の妹を――那波と雪乃を無事に元の世界に帰還させなければならないのだから。そうだとも。俺は、兄として二人を護ると約束したのだから。それが、兄としての当然の責務だ！
「妹」は！　すべてに優先するぜ！
しかし……いったいどうしてこうなった。
俺は酒が抜けるまで眠り直そうと目を閉じて、一ヶ月前の「あの日」のことを思い返していた……。

すべては、一ヶ月前のクリスマス・イブのあの日にはじまったのだ。

第二回　俺の妹が邪道栄に転生してしまったんだが……

そう。俺がこの真世界で「関張飯店」の店長になったきっかけは、さかのぼること、約一ヶ月前。
それは、俺がまだ真世界に召喚される以前。
懐かしの地元・横浜の中華街の片隅でのことだった。
「どうしてあたしがアニキとデートしなくちゃいけないの？　高校生にもなって、兄と妹が仲良くデートなんてする？　変態じゃないの？　だいいちあたしはアニキとデートしなくても、友達ならたくさんいますぅ。スマホにLINEすら登録していないアニキの百万倍いますぅ。アニキみたいに寂しく無料エロサイトやアラフィフちゃんねるの巡回なんてしてないんですぅ」
あの「出会い」から七年の時を経て、俺の二人目の「妹」――那波はすっかり反抗期を迎え、この兄を「水城家の恥部」扱いするようになっていた。洗濯機で自分の下着と俺のパンツを一緒に洗おうとするだけで「あーっ！　アニキの臭いが移っちゃうじゃん！」と

ブチ切れる。なぜこの俺が水城家の恥部なのだ！　俺は！　ちょっとばかり妹を心配しすぎるお兄ちゃんなだけだ！

そりゃ過保護すぎるかもしれんが、しょうがない。

なにしろ那波のやつ、いつの間にかスレンダー巨乳・派手でおしゃれっぽいリア充・ツインテールが似合う美少女という「三種の神器」を兼ね備えた超モテ妹に育ってしまったのだ。ここに来た時にはやせっぽちで日焼けしてて髪もまだ短くて、半分男の子みたいなキャラだったのに、成長期の女の子というやつはほんとうに恐ろしい。たしかに初対面の頃から大きな丸い瞳がやけにかわいかったが、いくらなんでもかわいく育ちすぎだ。そのくせ、そういう目で見ればビッチギャルっぽくも見えるのに実は男に対しては内弁慶で、恋愛経験ゼロと来ている。外見と内面のギャップが激しすぎる。これではいつどんな狼に騙されるか……！

「むっ？　し、しまった？　こんなところにバナナの皮がああぁっ？　転んだあっ!?」

「きゃっ!?　ちょちょちょっと！　アニキ、なに発情して三次元の妹を襲ってんのよ！　エロゲーでもやってろ変態！　離れて、離れてよー！　どこに顔埋めてんのさ、バカあ！」

うーむ。こんな路上に都合よくクッションがあって助かった……って、これはクッションじゃない！　那波のおっぱい、いや、胸ではないか!?　痩せてるくせにいったい何カッ

プあるのだ、これは？　くそっ、完全体那波め。身体だけはすくすく育ちやがって。妹といえば胸は慎ましやかというのが王道ではないのか。これは邪道だ。邪道すぎる。

「い、いいから離れろっての！　はあ、はあ、はあ……信じらんない！」

「う、うむ、すまなかった……」

い、いかん。普段は完全に意識の外へ追いやってしまっているというのに。那波が「義理の妹」だと久々に意識してしまうと、急に妙な気分に……なんてことだ！　たかがおっぱいごときのために、俺の妹への家族愛が揺らぐだと？　まだまだ修行が足りん！「兄貴道」、道険し！　こんなことでは、いざという時に那波を護れないではないか！

「って、アニキ！　電柱を相手に掌底突きの練習しないでいいから！」

「フ……根岸線の電車内でお前に痴漢しようとした男どもをことごとくブチのめしてきたわがゼロ距離掌底《ワンインチパンチ》も、完成には程遠いな。フハハハハ！　太極拳マスターの老師・水鏡先生の道場に通う日数を追加せねばな」

「ゼロ距離はワンインチじゃないよ！　過保護！　シスコン！　変態！　無駄な拳法のスキルあげてる暇があったら勉強するとか彼女作るとか他にやることあるじゃんバカ！『気』なんてうさん臭いものに頼るからアニキは陰キャなんだよ！　いつだって痴漢男の屈強な筋肉の前にはアニキのなんちゃって太極拳なんか通用せずに返り討ちじゃん！」

なぜか激しく罵られてしまった。

「フ……那波よ。俺はケンカなどという下等な遊びには興味がない。俺がマスターしたいものは、敵の肉体を破壊する『攻撃力』ではなく、妹を護るための『防御力』であり『抑止力』なのだ。何年かかろうともわが体内の『丹田』を開いて『気』を自在に練る奥義を修得してみせる。水鏡先生は、奥義開眼には五十年くらいかかると言っているがな。彼女を作るのはそれからだ」

「だからぁ、騙されてるんだよアニキ。丹田ってなに？　ヘソのこと？」

「下腹部にあるツボのようなものだ。時々、導引呼吸法の修行中にエロゲーのことを考えると下腹部がかあっと熱くなることがある。丹田に『気』が流れ込んでいる証拠らしい」

「それ性的に興奮してるだけだよ！　なにが丹田だよ。ケンカも格闘技も筋肉必須だって。せめてスピーディーな少林拳系にしなよ」

「筋力はしょせん有限だが、『気』は無限だ！　わが体内のみならず、天と地の間にも充満しているのだからな！　宇宙にあまねく存在するはずなのに現代の科学では測定不能なダークエネルギーとは、東洋武術で言うところの『気』のことに違いない！」

「それが横着だと言ってんの。だいたい丹田開くまで五十年もかかったら、青春完全終了じゃん」

「フハハ！　俺はお前を護ると誓った。故に俺のことよりも、約束を果たせる兄になることのほうが優先されるのだ！」

おっと。照れ隠しで中二病兄貴キャラを熱く演じすぎた。那波が「……ほんっと、シスコンなんだから……バカ……」と頬を赤らめて目を逸らしている。お、俺も恥ずかしくなってしまった。今日は俺もちょっとテンションがおかしい。

ああ、そうか……今日は、十二月二十四日……クリスマス・イブなんだな、と俺はふと気づいた。結局、実の母親側からはもうずっとなんの連絡もなかった。こちらだって新しい家庭を築いたんだ。大人の事情があるのだろう。新しい家族のことを思うと、俺から捜すこともためらわれた。そして、八年が経った……胸が痛んだ。が、那波に悟られてはならない。今まで俺はいちども、かつて「妹」を失った痛みを那波に悟らせたことはない。そのはずだ。そうとも。那波。お前は、俺にとって「実の妹」の代替品なんかじゃない……。

「俺はな、那波！　聖なるイブの日の昼間っから部屋で『SANGOKU大戦争』を起動して遊んでいるお前を見かねたのだ！　今日だけは俺の言うことに従え！　さもなくばお前が実は隠れ三国志腐女子だという秘密を、お前のリア充友達に拡散するぞ！　いいか、いいか、いいのかぁ～!?」

「腐女子じゃないっ！　そもそもアニキがあたしに『SANGOKU 大戦争』を教えたんじゃん！　だいいちLINEもTwitterもインスタもやってない陰キャぼっちのアニキが、どーやって情報拡散するのさ！」

「むろん、匿名でアラフィフちゃんねるにスレを立てる！『三国志戦国板』とか『栄光歴史ゲーム板』にコピペ連投の絨毯爆撃だ、まとめサイトに転載されるまで徹底的にな！　フハハハ！」

「フハハって笑うな中二病！　情けねーアニキだなあもう。いい？　あたしは、劉備・関羽・張飛の義兄弟トリオの熱い関係に萌えるだけなのっ！　はあ。何万回リプレイしても泣けるよね、『桃園の誓い』イベント……われら同年同月同日に生まれずとも、死ぬ時は同年同月同時に死すことを願う……くうう。かっこいい。義兄弟って最高……！」

うーむ。七年前に、てっとり早くこいつと仲良くなるために当時俺がハマっていた痛快三国志アクションゲーム「SANGOKU 大戦争」で一緒に遊んだこの俺にも責任はあるのだが。昨今の歴史ゲームは腐女子人気のせいで美形キャラばかりになってどうもな。司馬懿とか、首が一八〇度回転する「エクソシスト」の悪魔憑きみたいなおっさんだぞ。どうしてなぜ美形になったのだ……まあいい。

「那波。実は本日一日限定で、この中華街の隅っこで『SANGOKU 大戦争オンライン』

のオープンベータテストがこっそり開催されているのだ。偶然にも、わが師匠・水鏡先生が経営するボロ太極拳道場の隣で！　知ってしまった以上、お前に報告してそして参加させなければ、あとでシメられるのは俺だからな！」

「えー嘘だ。そんなおいしい告知情報、あたしが気づかないわけないじゃん。アニキ、あたしを中華街へ連れだしてなにかヘンなことでもするつもりなんでしょ。いくらクリスマス・イブにデートする彼女がいなくて惨めだからって、い、妹を怪しい建物に連れ込もうなんてさぁ。そ、それ、エロゲーのやりすぎだから。あ、アニキがヘンな事件起こしたら、妹ゲームが規制されてアニキは全国の変態アニキ紳士から恨みを買って抹殺されるから」

「あらゆる意味で断じて違う。ほんとうにほんとうなのだ！　嘘だったら江戸清の豚まんを三個おごってやってもいいぞ！」

中華街名物、江戸清の豚まんは七年前のあの日から那波の大好物なのだ。那波はたちまち目を輝かせた。

「じゃ、じゃあフカヒレ豚まんも二個追加で！　わかったよーしょうがないな～」

「うむ。任せろ！　近頃、ここ横浜では謎の行方不明事件が多発している。大桟橋から出港したフェリーごと喪失して集団蒸発した連中もいるという噂まで。だが、この俺が付いていれば心配ない！」

週末の中華街のメインストリートは国内外から集まってくる観光客でごった返しているが、一本入った裏通りは寂しいものだ。そんな裏通りの一角に、自称太極拳マスターで国籍不明の謎の老人・水鏡先生が開いている系統不明の太極拳道場「東方無敗」がある。

しかし本日二度目の顔合わせとなった水鏡先生は、なぜか道場ではなく、お隣の「SANGOKU 大戦争オンライン」ベータテスト会場のゲート前で甘栗を売っていた。

「よいぞ、よいぞ。妹さんと二人連れとは珍しいのう、秀一よ」

「どうしてベータテスト会場に張り付いてるのだ？　師匠」

「今のわしは、『SANGOKU 大戦争オンライン』ベータテスト会場の門番役のバイトなのぢゃよ」

「なんだと？　そこまで深刻な経営難に陥っていたのか？」

「ううむ。容易に丹田が開きそうにないお前を誘うつもりはなかったのじゃが、妹さんが一緒ならば、参戦させるべきなのかのう……これも『運命』の導きかのう……獅子は、わが子を千尋の谷底に突き落とすと言うしのう……わかったわい。よいぞ、よいぞ」

那波が「こんにちは！」とリア充をつくろった笑顔で師匠に挨拶する。こいつ、外面だけはいいな。

「むほー。よいぞ、よいぞ。最近の日本人の娘さんは発育がよいのう……この小生意気な

ロリフェイスにこのわがままボディ。人類文明の一種の完成形、リリンが生みだした最高の生きた芸術じゃのう。乳はいいのう……長生きはしてみるもんじゃ……お、お嬢さん。老い先短いこのジジイに、冥土の土産としてぜひぱふぱふを……」

「……ねえアニキ。このセクハラ爺さん、向かいの焼き豚屋で焼き豚と一緒に吊していい？」

そういうことは本人に言え。

「師匠は老いているんだ、許してやってくれ。それで、このでっかいパンダの顔面を象った『ゲート』を潜ればいいのか、師匠？　ゴーグルはつけなくていいのか？」

「アニキ。これってMRゲームだよ。会場内の空間全体がそのままゲーム世界になってるんだよ！　プレイヤー自身が自分の身体のままでキャラになりきって、直接暴れられるんだよ！　こんなゲームが実現するのは、何年も先の話だと思ってた～！　『SANGOKU 大戦争』開発チームもやるじゃん！」

「よいぞ、よいぞ。おぬしらは、手ぶらで参加すればええぞ。武具とか防具はゲーム世界で入手できるのぢゃ。手荷物は全部そこのコインロッカーに入れてもらえるかのう。システムの都合上、電子器具や武器などを持ち込まれると危険なのぢゃ」

「それくらい、いいよいいよ！　参加する、参加する～！　あたし、張飛がいいなっ！」

那波はやっぱりやる気まんまんになっていた。だが那波。周瑜とか孫策じゃなくていいのか。張飛は明らかに美形キャラではないぞ。虎髭だぞ。

「フ……俺はさしずめ、知力、統率力、武力、カリスマをすべて兼ね備えた乱世の奸雄・曹操といったところだな。師匠よ、この水城秀一は三国志最強英傑の曹操孟徳を所望する！　フハハハハ！」

「参加プレイヤーがどの英傑キャラに割り当てられるかは、『SANGOKU 大戦争オンライン』のシステムが自動的に決めるので、わしにはなんともできぬ。それでよいか、よいか」

まあ無料だし本日限定のオープンベータテストだし、いいんじゃない？　将来正式にサービス開始されたら、リセマラしまくって張飛を引くまでチャレンジすればいいよ！　と那波が目を輝かせながらコインロッカーに俺たち兄妹の荷物……ケータイやら財布やらをしまい込み、「さあ行こうアニキっ！」と俺の手に嬉しそうに組み付いて「ゲート」を走り抜けていた。

那波のこんなはじけるような笑顔は久しぶりだ。最近はいつもむっつり怒っていて「アニキのバカ！」「シスコン！」「……ちょっとはあたしの気持ちもわかってよ！」って意味不明な理由でぷりぷり怒られてばかりだったからな。やっぱり、連れてきてよかった。

「うおっしゃあ！　張飛こーい！」

那波はわくてかでゲートの向こうへとかけこみ、俺と那波の視界を一瞬真っ白い光が遮って、そして次の瞬間。

「なっ、なんでよおおおおお～!?」

那波の笑顔は、この世の終わりを迎えてしまったかのような泣き顔になっていた。

「うわ～ん。アニキぃぃ～!?　あ、あ、あたし、邢道栄になっちゃった～！」

※

「どうして。どうしてええええ～!?　邢道栄って、『SANGOKU 大戦争』屈指のネタキャラ、出てきて速攻で斬られちゃうやられ役じゃんっ!?　うわあああん。イヤだあ張飛がいいよう。リセマラしたーい！」

い、いや待て。俺と那波は中華街の「SANGOKU 大戦争オンライン」ベータテスト会場に飛び込んだはずなのだが、目の前に広がっているこの壮大な風景はいったいなんだ？

俺と那波は、山の中腹に築かれた石台の上に立っていた。「陰陽二極」の紋様が刻み込まれている巨大な石台だ。なんだ、これは？

前方を見上げると山頂まで、この石造りの階段が長々と連なっている。千五百メートル級の高い高い山だった。しかもその山頂からは、白色光と黒色光の二本の「柱」が延びていて、天高くまで貫いている。文字通り、雲の向こうまで。

山を背にして振り返ると、眼下には関東平野をも超えるような広大な丘陵がどこまでも続いていた。この長い長い階段は、上は山頂、下は麓まで、ずっと続いているらしい。

俺と那波の「衣服」がいかにもファンタジー三国志世界っぽい武将甲冑姿に変化しているのも謎技術だが、それにしてもこのゲーム空間はリアル世界にしか見えない！

「って、アニキ！　お上りさんみたいにキョロキョロしてる場合じゃないでしょ！　見て。ほら。あたしのパラメーター。邢道栄になっちゃったよおおお～！」

甲冑姿に変身した那波の頭の後ろあたりに、たしかに「武将パラメーター」を表示するステータスウィンドウが浮かびあがっていた。

「英傑名：邢道栄　統率59　武力80　知力21　政治5　固有スキル：道栄即斬」

ぷっ……！　悲惨な知力と政治力だ。「SANGOKU 大戦争」の能力値のＭＡＸは100だから、これは酷い。へそで茶を沸かすぞ。武力だけはそこそこ一人前なのが、体育会系少女でソフトボール部所属の那波らしい。フハハハハハ！

「こらっ、笑うなーっ！」

「フッ……どうやらこのゲームは、個人の能力資質に応じて本人にステータスが近いキャラが割り振られるシステムらしい。つまり那波！　現実世界において、お前は知力21のおバカな脳筋キャラということだ！　これは摂取した栄養がすべて胸にまわってしまうせいだな、フハハハ！　あと『SANGOKU 大戦争』のやりすぎだ。少しは勉強しろ！」

「ハア？　なにを勝ち誇って笑ってるのさアニキ。バカじゃん？　アニキの武将パラメーター、もっと酷いじゃん。アニキ理論でいくと、アニキは現実世界でも壮絶な無能、超世のクソザコナメクジだということになるんですけどぉ？」

「な、なんだと？　どういう意味だ？」

「自分で見てみればわかるじゃん」

なるほど。俺の頭の後ろにも、俺自身のステータスウィンドウが浮かびあがっていた。俺はそいつを指でタッチして、視界に入るように手前へ移動させてみた。するとそこには――おお、なんということであろう。

バ……バカな!? こ、これが俺の武将パラメーター。「SANGOKU大戦争オンライン」が査定した俺のキャラステータスだというのか!?

「英傑名：韓玄　統率13　武力28　知力5　政治3　固有スキル・農業充実」

なんてことだ。おっ……俺のほうが那波よりもバカだったのかーっ!?

「そんなバカなあああああ!? なにかの間違いだ、これはバグだ。バグに違いない！曹操孟徳に匹敵する超世の英傑であるはずのこの俺が、よりによって韓玄だとおおお!?『SANGOKU大戦争』ワースト無能武将四天王の一角ではないかあああ！」

「やーい。アニキのクソザコナメクジー！ 知力5、だって。なにその武力。28ってなに。女の子以下じゃん。妹の半分もないじゃん。まあ、太極拳を習ってなかったら武力も4くらいだろーから、これでも水増しできてるのかもしれないですけどぉ。ぷぷっ……！」

二人で互いのパラメーターを罵り合いながら山の麓の村へ下りてみると、三国志時代の名士っぽい格好をした若い眼鏡男が、手に巻物のようなものを持っていた。

「やあはじめまして。僕の名は許劭。道士にして人物鑑定士だよ。きみたちが言うところのチュートリアル役さ」

俺と那波の姿を見てわらわらと集まってきた村人たちが、「久々に英傑を引き当てたと思ったら」「韓玄と邢道栄？」「……ひとつ星英傑だ」「こりゃ大ハズレだなー」「もう、当分召喚できない……」「アア……もうこの村もおしまいだ……」とぼやきながら、それぞれの仕事場へ散っていった。村の周囲に柵とか作ってるみたいだ。

「許劭とやら。さっそくだが、このゲームはバグっているよ遊べない。那波が邢道栄なのはともかく、この優秀な俺が韓玄なわけがない！ リセマラさせろ！」

「いや、そう言われてももうきみたちは英傑に紐付けされちゃってるからね。もともとの能力などに応じて自動的に割り振られるんだ。名簿にもほら、きみたちの英傑名と真名が浮かびあがっているだろう？」

この巻物は「月旦表」と言ってね、どの英傑が召喚されて『現存』しているかどうかを表示してくれる便利なアイテムなんだよ、と許劭がへらへら笑った。軽い野郎だ。

「韓玄――水城秀一」

「邢道栄――水城那波」

月旦表には、たしかにその文字が浮かびあがっていた。「紐付け」成立というわけか！

能天気な那波が、

「あー、わかった！　那波の『那』と邢道栄の『邢』って似てるよね！　それであたし邢道栄になっちゃったんだー！」

とアホなことを言って現実から逃避している。いや、この場合はゲームからの逃避か。どっちにしてもアホだ。いったいどこからこんなポジティブシンキングが湧いてくるのだ。

「だが、俺は認めん！　間違っているのは俺たちではない、このゲーム世界のほうだ！だいたい貴様、ＮＰＣの分際で人間さまを値踏みするとはどういうつもりだ！」

「いや～。そんなこと言われてもね。この世界は、『ゲーム世界』じゃないんだよ。『真世界』なんだ。こちらの世界こそが、正統なほんものの『世界』なのさ。今まできみたちが暮らしていた世界のほうが、真世界から分岐して派生した『異世界』なんだよ？」

許劭のやつ、本格的にバグってるらしい。わけのわからないことを言いはじめた。

「ん～。知力5のきみには難しいかな？　つまり僕たちこの真世界の住人こそが、『人間』。きみたちのほうが『キャラクター』なんだよ。きみたち兄妹は、ほら、あの泰山の山頂から召喚されたんだ。泰山から延びているあの光の柱は『異世界』に繋がっていてね、あちら側からきみたちを『陰陽台』へと召喚したわけさ♪」

あ、あれ。こいつは嘘をついていない。なんとなくわかってしまう。どういうことだ？

瞬間、俺の背中が粟立っていた。ぞくっ、と。那波も同じらしい。俺の背後に隠れるように抱きついている。で、では、水鏡師匠は……真世界の人間だったということか？

「その昔、真世界で原因不明の大異変があってね。何人かの仙人道士が、生きながらに異世界に飛ばされてしまったんだ。で、彼らは帰還するために異世界に『門』を築いて泰山に繋げようとあちらであれこれがんばってきた。向こうの異世界では、真世界の主要なエネルギー源たる『気』の力が弱いらしくて、かなり苦労しているようだねえ」

泰山に繋がる門？　それって、もしかしてあのパンダの「ゲート」のことか!?

「しかも大異変の折に、本来ならば歴史を動かしていくはずの英傑たち、『正史英傑』の多くが真世界から消えてしまったんだ。曹操とか劉備とか、いずれ歴史に名を残すはずの英雄豪傑たちがね。だが『正史英傑』個々の『概念』と『能力』だけは残っている。この月旦表に、彼ら正史英傑の名前とパラメーターが書き込まれているのがその証拠だよ」

待て。邢道栄は、正史には存在しない「三国志演義」オリジナルの架空の武将キャラだぞ。ではやはり、ここは俺たちが生きてきた世界の「過去」とは別の世界なのか？

「もう、この国を護ってくれるはずの英傑たちはいない。北方に大量出現した『亜人』たちが南下を開始し、中原へと迫っている。早晩、人類は滅亡する。ごらん、この巨大な砂時計を。これは『世界滅亡砂時計』といってね」

なるほど。ヒョロ眼鏡の背後には、バカでかい砂時計が据えられている。かなりの量の砂が下へと落ちているな。

「この砂がすべて落ちきれば、万里の長城を突破して『亜人』の大集団が中原へとなだれ込んでくる。砂の落ちる速度は状況に応じて変動するので、正確な予測は難しいんだが、もってあと五年か、あるいは三年かな。そこで僕たちは異世界に飛ばされた水鏡たちと互いの世界の『門』を通じて連絡をとって、策を講じたんだよ」

「まさか……異世界の人間たちに『門』を潜らせて真世界へ召喚して戦わせるシステムを作ったのか？　真世界を救うための『逆ガチャ』システムに、俺たちは巻き込まれた？」

「そうそう。きみたちから見れば、いわば『逆ガチャ』だね」

「……あ、アニキ。あたしたち、ガチャで異世界に召喚されちゃったってこと？　それとも転生？　生きてるままだから、やっぱり召喚？　あうう、自分が何者だったかわかんなくなってきたあ～！」

「落ち着け那波！　おい許劭、これはいわゆるアブダクションではないか！　人攫いだ！　人権侵害だ！　いいから今すぐ那波を元の世界に戻せ！」

「いやいや、ただの人攫いとは違うんだよ。異世界人をそのまま真世界に召喚しても、『丹田』が開いていないきみたちは正史英傑のようにはうまく『気』を練れないから、武

将としてはさほど役に立たないんだ。ところがね、神さまってのはいるもんだねえ。泰山の門を潜った異世界人のうち、『英傑に封じられる資質アリ』と判定された者は、自動的に正史英傑の『概念』と『能力』とに紐付けられるんだ！　きみたちは異世界人でありながら正史英傑の能力を与えられた存在、『封神英傑』なんだよ！」

おお、封神英傑だと……？　って、中二病マインドをうずかせている場合じゃないぞ、俺！　韓玄の能力なんぞを与えられたからって、なにができるというのだ！

「きみたち封神英傑には、正史英傑の『能力』が備わっているというわけさ！　召喚に応じてくれたきみたちへ贈られる特典ボーナスみたいなものだよ。しかも固有スキルは最初から有効なんだ。初心者でも、そこそこ無双できるよ♪」

「だが断る！　召喚された英傑は、マスターに仕えなければならんのだろう？」

「いやいや。マスターとかいないから。でもこの国は今、亜人たちに扇動された黄巾賊の乱のせいで混乱状態でね。英傑の力で漢王朝の再興、この国の再統一を果たしてほしいんだよ。早く再統一しなきゃ亜人が続々と南下してきて人類滅亡しちゃうからね♪」

僕たち真世界人はすでにこちらの真世界側で肉体を持ってしまっているから封神英傑にはなれないんだ、異世界人のきみたちでなければダメなんだ、と許劭は軽～く笑った。

「召喚される異世界人に若い娘さんが多いのが謎なんだけど、ま、筋力よりも『気』の力

のほうが強い真世界では男女に体力差はないからそれは問題ない♪」
「ああ。女の子が多いのは、昨今の三国志業界を席巻している腐女子勢力のせいだろうな。だが、そんなことよりも！」
いったい、どうすれば帰還できるのだ？
「うわああん！　アニキ、どうしよう！　これってきっと孔明の罠だよー！　ログアウトできないと、冬休みが終わっちゃうよう！　お父さんもお母さんも心配するよう……！」
「ああ、だいじょうぶだよお嬢ちゃん。泰山の門はね、一方通行じゃないんだ。異世界に帰る方法はちゃんとあるから。それはね……」
許劭がやっと「帰る方法」を教えてくれそうになったその時。
異変が起きた。
そう。
「許劭先生～、たいへんだあああ！」
「防護柵が完成するよりも早く、黄巾賊が奇襲をかけてきやがった！」
「農民兵だけならともかく、大将は亜人っす！　ありゃ俺たちの手には負えねえっす！」
「一縷の望みを託した渾身の英傑召喚も、星ひとつ英傑の二連発というハズレを引いてしまったから、もう無理っす！」

「「蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし！」」
「「歳は甲子に在りて、天下大吉！」」
一心不乱に奇妙な呪文を唱えながら村を囲む柵へと殺到してくる黄巾賊の兵たち。みな頭に黄色い布を巻いている。「んほおおお！」と叫んでいる大将は、狸とオークが融合したような半人半獣の怪物だった。で、でかい。頭に角が四本生えている。
那波が「あれオークじゃん！　捕まったら苗床にされちゃうよう！」と怯えている。那波。お前……いったいどこからそんなエロ知識を……見た目は爽やかスポーツ少女なのに、やっぱりムッツリなのか？　ムッツリだったのか？　くっ、兄さんは悲しいぞ！
「もう来たのかい？　真世界での『黄巾賊』は、万里の長城を越えてきた亜人が流民を集めて扇動している反乱集団だ！　このところ大飢饉が重なって、餓えた流民がどんどん黄巾賊に参加して村を襲撃しているのさ。流民だけなら僕らでも防ぎようがあるんだが、亜人は無理だなあ。ありゃ『諸懐』という強悍な種族でね。一騎当千の武力を誇る英傑でなければ対処できないよ……とはいえ」
許劭が「韓玄と邢道栄じゃあ無理だね。絶対に戦っちゃダメだ。きみたちは裏門から逃げなさい」と俺たちを追い払う仕草を見せた。
こ、ここはお言葉に甘えて逃げよう。村人たちがＮＰＣではなくて人間だと知った今、

心苦しいが、さすがに武力28の韓玄では……俺一人ならばそれでも参戦するべき場面だが、まだ右も左もわからない状況で那波を危険には巻き込めん！

「うんうん。逃げなさい。まあ、封神英傑は身分が高いからたとえ黄巾賊に捕らえられてもまず殺されないんだけどね。でもね、邢道栄ちゃん……」

「許劭さん！　でも、村人のみんなはもしかしたら殺されちゃうんだよね？　だったら逃げちゃダメだよアニキ！　アニキは韓玄だから無理だけど、あたしは一応邢道栄だから！　武力80あるから！　な、な、苗床にされたくはないけれど！　でもあたし、戦うよっ！」

「な、なんだと那波？」

しまった！　那波は劉備・関羽・張飛の三兄弟にどこまでも憧れている女の子。つまりどっぷり義侠。正義感が強いのだ！　お前、張飛じゃないんだぞ。邢道栄なんだぞ！　無茶はよせ、苗床にされたらどーする！

止めようとしたが、那波のほうが俺よりも足が速い。俺が追いついた時にはもう、すでに那波は槍を構えて最前線へと突撃していた。

「ま、待て那波！　ええい、やむを得ん！　ならば、俺も戦おう！　水鏡師匠のもとで太極拳の修行を積んできた俺ならば、少しは『気』を練れるはず！　この世界は筋力よりも『気』のほうが強い！　すなわち、今の俺はこの世界のオリジナル韓玄よりもはるかに強

さを増している可能性が微レ存……！」

ああ、ダメだダメだ、ダメだよおおおお！　黄巾賊を率いている亜人は、流民の力で漢王朝を倒して中原へ移住しようとしている連中、『中原移住派』なんだよ！　だから僕も村人たちも降伏すれば命までは奪られないよ！　僕たちのことはいいから逃げるんだ～！と背後で許劭が悲鳴をあげていた。

だが、もう手遅れだ。

黄巾賊の一般兵たちは、どうにかなった。たしかに、俺たちは強くなっている。これが封神英傑の力か。殺さずとも、峰打ちで倒せるくらいに余裕があった。どうやら人間の一般兵は武力3から5といったところだ。これなら、いけるか？

しかし……。

「んほおおおおおおお！」

もう、体格からしてまったく違う。亜人はまさしく「パワーこそ力」を地で行く獰猛な獣だった。召喚されたばかりで経験の浅い俺たちはまだうまく「気」を練りきれない。英傑としての全力を出すためには、どうすればいいんだ？

「あ、アニキ……！　これ、武力が高いだけじゃ無理だよ！　槍なんか通らないよ！」

「そうか、もっと強力な武具が必要らしいな！　那波、逃げろ！　ここは俺が……！」

だが那波は逃げなかった。むしろ俺を庇おうと前へ。ならば俺はその那波のさらに前へと進まねばならない。それが俺の兄貴道だ！

そして。

「んほおおおおおおおお！」

無茶苦茶に強い亜人の一撃を受けて、俺も那波も、あっけなく倒されて捕縛されてしまったのだった――。

なんてことだ。十分も経たないうちに、村は制圧されてしまった。戦闘は黄巾賊の圧倒的勝利のうちにたちまち終了し、俺も那波もそして許劭も縄で後ろ手に縛られて地面の上に転がされていた。

「んほおおおおー！　泰山への玄関口にあたるこの村を落とせば、もう人間は泰山に登れなくなり、封神英傑を召喚する輩も消える！　われら亜人が率いる黄巾賊の大勝利だんほおおおおおー！　漢王朝の命運、ここに尽きたんほお！　お前ら三人が村の隊長格か⁉」

諸懐とかいうバカでかい亜人が、椅子に腰を下ろしながら俺たちを睨んできた。

「名乗っちゃいけない。ほんとうは公の場では真名ではなく英傑名を名乗るのがマナーなんだけど、決して英傑名を名乗っちゃいけないよ」と許劭が念押ししてくる。なぜだ？

だがこの時、許劭から「月旦表」を取り上げていた黄巾賊の一人が「この中に邢道栄がおります！　その娘っ子です！」と叫んでいた。

「邢道栄⁉　邢道栄だとおおおおおお？　んほおおおおおおー！」

意外にも物静かに椅子に座っていた亜人が突然、すさまじい雄叫びを発しながら立ち上がっていた。一瞬で理性が飛んで獣に戻ったかのような……い、いいったいどうしたというのだ？　黄巾賊の兵士たちも、同時に「なんと！」「邢道栄！」と口々に叫んで興奮している。な、な、なにが起きたというのだ？

「おおっ、邢道栄を捕らえたか！　斬れっ！」

えっ？　アニキ？　と那波が隣に転がされている俺のほうに視線を送ろうとした、その瞬間。

ザシュッ！

嫌な音が響いて、そして――。

背中を大刀で斬りつけられた那波は、一撃でことときれていた。

地面の上に、赤い血が――。

俺は。
目の前で起きているこの光景を、「現実」だとは思えなかった。脳が拒否していた。
「けけけ邢道栄の固有スキル『道栄即斬』は、邢道栄を捕らえた武将はどれほどの徳人であっても即座に邢道栄を斬らずにはいられなくなるという、文字通りの『死にスキル』なんだよおおお！　ああ、邢道栄ちゃん……！　ご、ごめんね……」
おい。許劭。貴様、なにを言っている？　冗談はよせ！　那波が死ぬわけがなかろう！　バカな。こんなバカなことがあっていいはずがない！　那波、起きろ！　目を覚ませ！
「那波いいいいいいいっ!?」
だが、那波はもう、息を吹き返すことはなかった。俺を切なげに見つめながら、息絶えていた。
そんな。俺が、「SANGOKU大戦争オンライン」に那波を誘ったばかりに？　俺が、クリスマス・イブの中華街に那波を連れだしたばかりに？
護れなかった。それどころか、俺のせいで那波が……!?
俺は。
俺は、那波との約束を……守れなかった。
那波が……死んだ。

俺の、妹が。
頭が、真っ白になった。
「貴様ら！　貴様らあああああ！　殺してやる、殺してやる……！　う、う、うおおおおおおおおおあああああああああ！」
野獣のような咆吼をあげて亜人へ突っ込もうとした。しかし縄で縛られている俺の身体は、黄巾賊の兵士たちにあっけなく取り押さえられていた。くそっ！　放せっ！　貴様ら、よくも……！　ダメだ、韓玄の武力ではどうにもならない！　唇をかみ破り、血涙を流していくら叫んでも、俺は無力だった。
こんな。こんなことって。こんなことが許されるかああああああ！
「恨みを買ってしまったんほおおお。とんでもなく厄介な存在になってしまったんほおおお。やむを得ないんほ、韓玄も斬るんほおおおおお」
ああ。斬れ！　斬れ！
俺が。俺が。俺が那波を、死なせてしまったんだ……！
いや——待て！
まだだ！　命ある限り最後の最後まで、俺はあがくべきだ！　なぜならばまだ、那波を生き返らせる可能性がゼロになったわけじゃない！

「許劭！　なんとかして那波を生き返らせろ許劭おおおおおおおおおおおお！　俺の『気』だろうが魂だろうが命だろうが身体だろうが、なにを使ってもいい。絶対に生き返らせろおおおおお！　頼む！　那波を救ってくれ……頼む……！」

涙で俺の視界はぐにゃぐにゃに歪んでいるらしい。許劭の顔がねじ曲がって見える。

「む、む、無理だよ。無理だ。死人を再生するだなんて。僕にはそんな神さまみたいな力はないよ？　ぼ、ぼ、僕はただの道士だよ。ま、ま、魔性の神仙……しょ、しょ、諸葛亮……こ、孔明に魂を売り渡せば、もしかしたら。そんな悪魔みたいな真似ができる者は、真世界広しといえども孔明しかいないよ！」

「孔明？　三国志世界最高の智者、諸葛孔明か⁉　孔明ならば、できるのか！　どこにいるんだ、孔明は⁉」

「わ、わ、わからないんだ。だ、だ、大異変によって孔明の『存在』も消えてしまった。きっと孔明は真世界のどこかに封印されているんだ！　そそそれに、孔明に『願いを叶えてくれ』と祈って契約したらほんとうに魂を対価として奪われて魔界に連れ去られるってもっぱらの噂だよ……⁉」

孔明という名前を口にするだけで、許劭が本気で怯えていた。亜人が黄巾賊を率いている世界だ。孔明もまた、化け物の仲間なのかもしれない。魔性。化生。悪魔。魔女。神仙。

だが、それでいい！　むしろ、かすかな「可能性」が、「希望」が、そこにある！

「……諸葛孔明……！　どこに眠っている？　聞いているか？　俺の声が届いているか？　俺は誓う！　お前が悪魔でも魔女でもメフィストフェレスでもなんでも構わない！　俺の魂をお前に売ってやる……！　俺は地獄に堕ちてもいい！　だから、だから……頼む……那波を、救ってくれ……！　約束、したんだ……那波を……妹を、護るって……だから……俺と、契約してくれ……！」

ドオオオオオン⁉

すさまじい轟音。

両耳の鼓膜が震えると同時に。

世界の色が、反転していた。

昼が、夜に。

亜人も。黄巾賊の兵士たちも。許劭も。降伏して震えていた村人たちも。大空を飛ぶ鳥たちも。破壊された飼育場から逃げだしてきていた豚たちも。

すべての「時間」が、静止していた。

ただ二人の存在を、除いて。
俺と。
そして――。

「ふふっ。私を呼び出したのは、きみだな？　すでに時間は止まっている。ここは私だけの『世界』だ、水城秀一。たとえ肉体を封じられていても、この時間の『狭間』にならば幽体として顕現できる。私は、半分は人間だけれども、半分は化生の者だからな――ほんとうに、こんな私に魂を売り渡して魔女との契約を結ぶつもりか？　それはきっと、死ぬよりもずっとずっと辛いことだぞ。後悔はしないか？」

諸葛亮。
孔明。
神仙。
純白の道士服に、細い身体を包んでいた。
長い銀髪と、真っ白い肌。そして作り物の人形のように整った顔を持つ少女だった。あまりにも美しすぎて、生き物だとは思えなかった。俺は、言葉を失った。

異形だった。その瞳の色は、右と左とで異なっていた。オッドアイだ。片目は血のように紅く、片目は黄金色に輝いていた。人間の耳とは別に、煌めく「狐耳」をも持っている。
「私は、徐州は瑯邪生まれ。諸葛一族はその昔、はるか彼方の西方から中原へと移住してきた。亜人なのか、神仙なのか、化け物なのか、きみがいう『悪魔』なのかは知らないが、人ならざる者の血が諸葛一族には流れていてな。一族の中から時折、人外の特性を持つ者が生まれてくる。ある者は狸。ある者は馬。ある者は――九尾の狐としての特性が発現した私はその一族の中でも、千年に一人という特別な才能を持って生まれてきた。だから、幼い頃から泰山で道術、仙術、占術の修行を施されてきた。真世界と異世界にまたがる陰陽二極の理を解き明かし、『奇門遁甲』なる新たな術式体系を発明したのも、この私だ。そうだな。一言で言えば、真世界随一の天下の奇才だ。本来ならば、きみごときが会えるような者ではないのだ。ひれ伏すがいいぞ、愚物」
孔明が、羽毛扇を一閃すると同時に、俺の身体を縛っていた縄が霧散していた。
幽体って。「狭間」ってなんだ。なぜ時間を静止できるんだ。こんなことができる孔明は、ほんとうに神か、さもなくば悪魔ではないか。
「水城秀一？　私の望みはただひとつ――この滅びへと向かっている真世界を救うことだ。すなわち『天下統一』。日本から召喚されたきみならば『横山三国志』くらいは知ってい

るだろうから、説明は不要だな？」
「むろん、わかっている！　諸葛孔明、俺はお前の願いである天下統一のために働けばいいのだな？　その代わり、那波を生き返らせてくれるのだな！　その契約、承知した！」
「……やれやれ。さすがは韓玄に封じられるだけのことはある、知力が低い。きみは想像以上の愚物だな……少しは説明を聞け。死んだ人間を生き返らせることなんて、私にもできんぞ。そんな天の理に反する力は、真世界人であろうが異世界人であろうが、誰も持っていない」
「な……なんだとおおお？　そ、そ、それじゃ那波は……!?　那波はどうなるんだ？」
孔明に無理なら、もう誰にも無理じゃないか！
俺は思わず「がばっ」と立ち上がると、全力で突進して孔明の細い肩を掴んで揺さぶって言った。
「え、えええ？　ちょっと待て。ど、どうして？　幽体の私に、どうして触れることができるのだ、きみは？　あああありえない！　私の肉体は、ある場所に封じられている。今の私の姿は、魂だけの存在。狭間の世界に肉体を投射した『影』にすぎない。誰にも触れられるはずがないのに!?」
「知るかそんなこと！　那波を生き返らせることができないならば、どうして俺と契約し

ようとした？　詐欺か？　もしかして詐欺なのか？　俺は地獄堕ちになろうがいっこうに構わんが、さんざん期待を煽っておきながら那波を再生できないだなんて許さんっ！」
「ま、待て！　さ、触るなと言っているだろうに！　わ、私は男に触れられた経験がほとんどなくて……泰山の仙術道術修行では、絶対的な禁欲が重要で……いやあ、放してっ！」
孔明がぶるぶると震えて目に涙を浮かべながら、意外に幼い悲鳴をあげると同時に。
ドオオオオン！
俺の脳天に、稲妻が落ちていた。
俺は黒焦げになって、地面の上に突っ伏していた。
「はあ、はあ、はあ……なんだ。なんなのだ？　どうしてきみは、私の身体に……はあ、はあ、はあ……あ、あ、危うく、わ、わ、私のたいせつな純潔を奪われてしまうところだった……こ、このまま消し去ってしまおうか」
「ち、違う！　誤解だそれは。俺の行動原理はただひとつ、それは那波を救いたいという『妹愛』だ。『兄貴道』なんだ。妹を救うためならば、俺はどんな奇跡でも可能にしてみせる！　神にだって悪魔にだってなれる！　『妹』は、すべてに優先するぜ！」
錯乱していた頭が電撃を喰らったことでかえってすっきりした俺は、むくりと起き上がって復活した。もういちど、孔明をとっ捕まえて……！

「ふにゃっ？　いいから触らないで聞け！　さっきの雷は、死なない程度に加減してやったのだぞ！　次は焼き殺すぞ！」
「ら、雷撃がお前の固有スキルか？」
「ハア？　馬鹿にするな愚物。雷撃ごときはただの仙術のひとつだ。千年に一人の天才である私の固有スキルは、そんなちゃちなものではない。わが固有スキルは、時間を操る能力『北斗五丈』。きみが私の望みを叶えるために働くと誓えば、この力をきみに貸与して、時間を巻き戻させてやろう。つまり、死人は再生できないけれど、死ぬ以前の時間に戻せばいい。そういうことだ」
「じ……時間を巻き戻す⁉　那波が黄巾賊に捕らわれて斬られる以前に戻れるのか？　ほんとうに、できるのか⁉　しかも、俺にそんなスキルを貸してくれるのか？」
「うむ。ただし、『北斗五丈』の『器』がきみでは、あまり長い時間は巻き戻せないな。きみの乏しい道術才能値から逆算すれば、そうだな、邢道栄『死亡』の十分前くらいが限度だろうな」
　わかった！　契約する！　と俺は叫んでいた。
「いやいや！　だから少しは私の説明を聞け！　私が詐欺師だったらどうするつもりだ！　骨の髄まで愚物か、きみは！　身体を封印されている私は、容易には顕現できない。ろく

に真世界のルールも知らないままでたらめに行動されても困る！」
「この世界は俺たちを召喚して封神英傑として戦わせるデスゲームなんだろう？　中には、召喚されても適性がなくて英傑に封じられないやつもいるようだが。ともかく誰かが漢王朝を再興して天下を統一しないと亜人どもが南下してきてあと数年で滅亡する。それはもう、許劭から聞いたぞ」
「ふっ……まだ、その先がある。まず、天下を統一しても召喚された異世界人全員が異世界に帰還できるわけではない。『統一勢力に所属している、封神英傑を含む異世界人』だけが帰還できる。つまり、『敗者は帰還できない』」
　な……なんだと……⁉
　いや待て、「統一した君主」しか帰還できないのならば大問題だが、「統一勢力に所属している異世界人」全員が帰還できるのならば、問題にはならないはずだ。
「それ以前に、わざわざ同郷の人間同士で戦う必要なんて、ないじゃないか。封神英傑たちが談合して、八百長で統一すれば全員が帰還できるではないか！　君主をただ一人に絞り、残りの封神英傑と異世界人はみんなその君主に家臣として仕えるなり降伏するなりしてひとつの勢力にまとまれば、全員帰還可能だ！　なんだ、簡単なことではないか。今まで俺以外の誰もこんな簡単なクリア方法を思いつかなかったとはな、フハハハハ！　やは

り俺は、天才の器だったのだーっ！」

はあ。そんな八百長が有効ならば、真世界はとっくに統一されているだろうに。きみは救いがたい真性の愚物だな……と孔明にため息をつかれてしまった。哀れみの目線で見られている。くっ……！　それもそうか……！

「って、待てよ孔明⁉　それじゃあこの真世界での戦争は、八百長ブックも許されないほんとうのガチのデスゲームってことじゃないか！　お、お、俺たち異世界人をよくもこんな、ば、ば、バイストン・ウェルみたいな乱世に召喚して……！　そんなに戦わせたいなら、軍人でも召喚しろっ！　ゲーマーばかり集めてんだろうがっ！」

「わ、私がきみを召喚したのではないぞ。そういうクレームは異世界側に『門』を開いた水鏡たちに言ってくれ。なぜ八百長統一が不可能なのかを今から説明しよう。これは、きみが真世界を勝ち抜くためにとても重要なことで……」

「そんなことはどうでもいいいいいい！　だったら、クソザコナメクジの韓玄と邢道栄に巻き戻っても無駄だあああああ！　強くなければあああああ！　俺も！　那波も！　邢道栄なんて絶対にダメだ！　なにが『道栄即斬』だっ！　あんな死にスキル持ちじゃ、那波は何度生き返ったってそのたびに斬られるじゃないかあああああっ！　そんな残酷な真似ができるかっ！」

俺は雷撃の危険すら忘れて、再び孔明の肩を「がしっ」と掴んでいた。なぜだ。なぜ那波をこんな「運命」に巻き込んでしまったんだ。召喚するなら、なぜ俺一人で止めてくれなかったんだ。なぜなんだ、水鏡師匠……が、これはゲームではない。「現実」なんだ。悔いても怒っても叫んでも、どうにもならない。くそっ。涙がまた溢れてきた。恥ずかしいのに、止まらない。

孔明は肩を掴まれるのが苦手らしく、「い、痛い……や、やめろ」と震えている。最初に「狭間」に登場してきた時の傲慢そうな表情は消えて、痛々しい少女の表情に変わっていた。そうか。これが、孔明のほんとうの素顔……人と会話する時には、虚勢を張っているのか。どうやら孔明は、直接人間と触れあった経験があまりないらしい。だが、悪いが今だけは孔明に遠慮している場合じゃない。那波の命がかかっているんだから。

「このデスゲームのルールの説明はあとでいい！　契約条件を追加してくれ！　ほんとうに戦って天下を統一しなければ帰還できないなら、韓玄と邢道栄じゃ無理だ！　俺と那波をもっと強い英傑に封じてくれ！　那波は張飛に憧れていた。張飛ならば、呂布と関羽くらいしか太刀打ちできる相手はいない。できれば、那波を張飛に。そして俺にも、那波をこんどこそ護れるくらいの強い力を……頼む、孔明！」

「……そ、それならば問題ない。きみには、私の幽体に直接触れることができるほどの激

しい『情』がある。やはり『北斗五丈』の『器』になれる希有な資質の持ち主だ。だからこそ、私は一見愚物に見える上に韓玄に封じられてしまったきみの召喚に応じたんだ……」

「悪い孔明。あさっての方角じゃなくて、こっちを見てしゃべってくれ」

孔明は、他人に接近されると目を逸らすらしい。距離を保っている時は「ふふっ」と偉そうに微笑んでいるのに、実は照れ屋というか内気なんだな。

「う、うるさいぞ、愚物。いいか？　きみはこれより、韓玄との紐付けを破棄して、『劉備玄徳』として再封されて天下を統一する。その条件を呑めば、契約は成立だ。ただし誰にもこの契約を知られてはいけない、時間操作の能力が存在することを気づかれてはいけない。真世界の因果律が破壊されてしまうから。それが絶対の禁則事項。天下が統一されるか、あるいは私が『時よ止まれ』という言葉を口にしたその時、契約は終わる――そしてその時、きみは」

劉備、玄徳!?

三国志の主人公。孔明の主君。孔明を「三顧の礼」で軍師に迎えて蜀漢の皇帝となり、漢王朝を簒奪しようとしていた「乱世の奸雄」曹操と戦い続けた英傑の中の英傑。

ほんとうに劉備の「概念」と「能力」を、俺が引き継ぐことができれば。

もしかしたら、できるかもしれない。

天下の統一。漢王朝の再興。

だったら。

俺の魂がどうなっても、いい。

契約が終了すると同時に、永遠の地獄に堕とされるのだとしても。

俺は、那波を帰還させるために、劉備玄徳として生きる……！

「妹」は、すべてに優先するぜ！

「水城秀一。きみが劉備になれば、きみの妹もまた劉備の家族になる。肉親、家族、近親者は、近しい一族英傑や義兄妹英傑に優先的に紐付けされる。そういうシステムなのだ。だからきみの妹は、劉備の義妹・張飛になれるだろう。能力が高いあの子が荊州のザコ武将邢道栄に紐付けられてしまったのは、兄であるきみの能力が低すぎて韓玄になってしまったからだ。どちらも荊州のやられ役だからな――でも。きみが劉備になれば、彼女は実力相応の英傑に封じられるだろう。武力99を誇る張飛益徳に」

張飛！　張飛。那波が憧れていた張飛。一騎当千、万夫不当の強者。あいつを張飛に「転生」させてあげられれば、きっと那波を生き残らせることができる！

「ただし水城秀一？　劉備や張飛のような五つ星クラスの有名な封神英傑には、正史英傑が辿るはずだった『破滅の運命』が忍び寄ってきて、突然降りかかってくるというリスク

もあるぞ。きみたちの言葉で言えば、『運命強制イベント』だな。『フラグ』を立てて発生条件を満たしてしまえば、『破滅の運命』が発動する。劉備も。張飛も。そして関羽も。劉備三兄弟は優秀だが、揃って『運命』に呑み込まれて志半ばで死んでしまうリスクを背負っているのだぞ？　『正史』でも『演義』でも、三人が三人とも悲劇的な死を遂げているだろう？　だから、私の説明を最後まで……ああもう。顕現できる時間の限界が迫ってきてしまったじゃないか。きみが無駄話ばかりするからだぞ、この愚物め！」

「構わない！　妹さえ救えれば、それでいい！　『運命強制イベント』なんて、破滅フラグなんて、この俺が全部へし折ってやる！」

「……き、きみは。どうして。それほどに、底抜けの愚物なんだ……？」

「ガキの頃、俺は兄として妹を護れなかった。病に苦しむ妹から逃げた。妹の辛そうな姿を見ているのが辛くて……ずっとずっと、後悔してきた……だからこんどこそ妹を、那波を護ろうと誓った。それなのに……那波は、俺の目の前で殺されてしまった。俺のせいなんだ！　俺が、弱かったから……こんどこそ。こんどこそ、俺は」

涙の粒が孔明の頬に落ちた。

「俺は必ず那波を元の世界に帰還させる！　その後はお前の好きにしろ！　孔明！　俺の魂をお前にくれてやる！　俺の身体も！　俺の心も！　なにもかも、すべてをだ！　お前

が魔女だろうが悪魔だろうが人外だろうが、いっこうに構わん！　那波を救う機会を俺に与えてくれるのならば、お前は俺にとっては……救いの女神だ！」

「……あ……あ……」

孔明がなにかを口走ろうとした。なにを言っているのか聞こえなかった。声が出てこないらしい。真っ白い頬を赤らめながら、ふるふると震えている。やはり肩を掴まれて至近距離から叫ばれるのが苦手なのだろう。お、俺も、急に恥ずかしくなってきた。人間離れした美しさを誇るとはいえ、孔明も……俺と年齢の近い女の子だ。そして、やはり、「人間」なのだ。神仙の血が混じっていようとも。なぜならば人間だけが、こういう複雑な、見ているだけで胸が締めつけられるような表情を浮かべることができる。八年前のクリスマス・イブの夜に。七年前の春に。俺は、二度、見たことがある……。

そして。

孔明の白い指が、俺の頬に添えられて。

「――水城秀一。契約の、口づけを。時は動きだす。生きろ。きみの『真世界』を」

俺のファーストキスは、こうして唐突に奪われた。

反転していた世界の「色」が、再び逆転して元に戻っていた。

時が、再び動きだした。

ズキン。うっ、頭が……！　俺は、激しい頭痛と言いがたいデジャブ感に襲われていた。

時間を逆行した副作用なのかもしれない。

ここは泰山の麓にある村。泰山を訪ねる者たちの「入り口」となっている村。

そして俺の隣には、那波がいる。

ああ。生きている。

那波が、生きている……！

孔明との契約は、成立したんだ。

ほんとうに、時間が巻き戻ったんだ。那波が……！

俺たちの正面では、月旦表を開いたヒョロ眼鏡野郎の許劭が、ぶつぶつ早口で長ったらしい説明をしている。だが俺は一周目ですでに聞いた。聞き流して構わん！　そんなことよりも。

「……那波……ななみいいいい！」

ああ。生きている。俺は那波の身体を抱きしめていた。幻じゃない。ほんものの那波だ。間違いない。

「ええっ？　どうしたのアニキ？　ちょ、ちょっと？　人前で抱きつかないでよ、なに泣いてるのよ？　変態じゃないの？　いいいいくらクリスマス・イブに相手してくれる女の子が妹しかいないからってさ、ほんとにヤキがまわったのアニキぃ？　シスコン通り越してマジキモいってば！」

なんとでも言え！　こんどこそ、こんどこそ俺は那波を護ってみせるからな！

「妹」は、すべてに優先するぜ！

俺はもう、二度としくじらない！　なぜならば……。

「英傑名：張飛　統率87　武力99　知力21　政治11　固有スキル・燕人小妹」

那波の頭の後ろに開いているステータスウィンドウを俺は確認した。英傑名とパラメーターが、すべて張飛のものに書き換えられている！　武力99！　あの死にスキル「道栄即斬」も吹っ飛んだ！　これならば！　この三国志世界の乱世をも、必ず生き延びられる！

知力だけは邢道栄に封じられていた時からまるで成長していないのだが、この21というのが那波のもともとの知力の才能限界値なのだろう。やっぱり那波はアホだな。はは。ははは……。あ、あれ。目から水が。

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってよ！　アニキ、帰れなくなったからって泣いてる場合じゃないって！　これってきっと孔明の罠だよー！　ログアウトできないと、冬休みが終わっちゃうよう！　お父さんもお母さんも心配するよう……！」

「ああ、だいじょうぶだよお嬢ちゃん。泰山の門はね、一方通行じゃないんだ。異世界に帰る方法はちゃんとあるから。それはね……」

帰る方法ならば、もう孔明から聞いた！

たちまち村人たちが血相を変えて許劭のもとに集まってきた。

「許劭先生～、たいへんだあああ！」

「防護柵が完成するよりも早く、黄巾賊が奇襲をかけてきやがった！」

「農民兵だけならともかく、大将が亜人っす！　ありゃ俺たちの手には負えねえっす！」

「「蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし！」」

「「歳は甲子に在りて、天下大吉！」」

まるっきり「一周目」と同じ展開だった。

「んほおおお！」
「あれオークじゃん！　捕まったら苗床にされちゃうよう！　で、でも、村人たちを見捨てていくわけには……！　それに、あたし張飛だし！　武力99なんだよ？　村人たちのために戦うよっ！」
　おい待て那波！　参戦を決断するまでのステップが早まってるぞ！　くっ、邢道栄だった時よりも強気になっている！　まさか張飛になったから、なのか？
「うんうん。『諸懐』といえども一騎当千、万人の敵の武力を誇る張飛ちゃんなら、なんとか勝てるかもねえ。でも、能力値は高くてもまだ英傑に封じられたばかりで『気』のレベルはゼロだし、五つ星英傑の真の『力』を最大限に引き出すための固有アイテム『宝貝』を入手してないしねえ……逃げたほうがいいんじゃないかなあ？」
　こらっヒョロ眼鏡！　「宝貝」ってなんだ？　初耳だぞ！
「ダメだっ！　逃げるぞ那波！　亜人といえども黄巾賊の連中は『中原移住派』だ。許劭も村人たちも降参すれば殺されることはない！　あいつらの目的は、泰山の玄関口を封鎖して封神英傑をこれ以上召喚させないことにあるのだ！」
「って、小難しいよアニキ。なに言ってんのさ？　だいたい、なんで黄巾賊の作戦をアニキが知ってるの？　さっき召喚されたばかりじゃん？」

「それは、こうめ……いや、許劭から聞いたのだ！」
　ええ？　僕はそんなこと言ってないよ？　おかしいなあ？　とヒョロ眼鏡が言いだした。
　えーい黙っていろというに！
　俺は素早く許劭の眼鏡を取り上げて、思いきりあさっての方向にぶん投げた。
「ああっ。なにも見えないじゃないか。なんてことをするんだい、きみは。眼鏡、眼鏡」
　よしっ！　許劭が3の目になって地面を這いつくばっている隙に、那波を連れて裏口から逃げるッ！
　だが。
　なんてことだ。一周目と展開が違う！　裏口へ向かおうとしていた俺と那波のもとに、村人どもがなぜか目をきらきらと輝かせながら「待ってくだせえ！」「戦場はあちらですぜ！」「旦那ああああ、頼りにしてますよおおお！」「おうよ！　俺たちゃ、あんたのためなら死ねるぜえええええ！」「黄巾賊退治から、覇業ってやつをはじめましょうやあ、劉備の旦那ああああ！」と大音声を発して集まってきた。
「ついに待ちに待った、俺たちの英雄が召喚されたんだあああ！」
「これで乱世は平定されるぞおおおお！　世界は救われる！」
「華々しく初陣を飾りましょうぜ、旦那ああああ！」

「漢王室の一門に連なる、伝説の義侠！　高貴な血筋を引きながら、貧乏暮らし！　筵を売って親孝行！　茶を買う銭もねえ！　俺たち庶民の味方！　そこに痺れる憧れるぅ！」
「俺たちゃ、あんたのためなら、死ねる！」
「劉備玄徳、ばんざあああい！」
な、なにを言っているのだ？
俺は、自分のステータスウィンドウを目線に入れるよう指で引っ張って動かしてみた。
すると。

「英傑名：劉備　統率77　武力72　知力73　政治75　固有スキル・侠絶大徳」

そうだった！　ただ時間を巻き戻しただけじゃないんだ。俺は孔明との契約によって、劉備に再封されたんだった！　だからこそ俺の能力値に足を引っ張られていた那波が張飛に封じられたわけだが……しかし、なんという微妙な能力値だ。全部70台ではないか！　ぶっちゃけ孟達レベルだぞ。むろん韓玄のようなクソザコナメクジではないが、この微妙な能力値しか持たない武将の、どこが伝説の英雄なのだ？　三国志最高の武将・曹操なんか絶対、武力以外はオール90台だぞ!?

「ああ。やっと眼鏡が見つかったよ。まったく劉備くん、酷いことをするなあ。きみの固有スキルは『侠絶大徳』。きみがたとえ百戦百敗しようとも、どれほど無様な失敗を繰り返そうとも、真世界人の庶民たちに無条件に愛され慕われ頼られるという文字通りのチートスキルだよ。ちなみに、『フハハハハ』と高笑いすれば効果三倍増だ♪」
な、なんだと？　この中二キャラをえんえんと演じろと言うのか、貴様は？　俺だって那波に対して素で接するのが恥ずかしいから痛キャラを演じているだけで、好きでやってるんじゃないんだ。精神をゴリゴリ消耗するんだぞ、疲れるんだぞ？　夜寝る時とか、自分の言動のあまりの痛さに「うわあああ」と悲鳴をあげたくなるんだぞ？
「きみの能力値はごく平凡だから、キラ星の如き封神英傑たちを前にすれば大苦戦は確実だけれど、彼らはみな、きみを『乱世を平定して漢王朝を復興してくれる救世主』と信じてやまないのさ♪　漢王室の末裔にして、筵を売りながら侠客として生きてきた庶民派。こんな庶民受けする英傑、他にいないもんねえ♪」
ちなみに劉備くんは筵売り出身だから、地盤ゼロ財産ゼロ人脈ゼロ武功ゼロ一族英傑ゼロで無位無冠だよ。あるのは名もなき庶民たちからの人気だけだよ、がんばってね、と許劭はへらへら笑っている。
「要らんわ、そんな厄介な力！　もっとこう、英傑らしい力はないのか！　勝利を約束さ

れた聖剣エクスカリバーとか、そういうのは！　一撃で亜人の敵兵一万人を蒸発させるようなオーバーキル兵器は！　宝貝とかいうアイテムが劉備にもあるんだろう？」

「宝貝は、基本的には五つ星クラスの英傑だけが所有できる、莫大な『気』が封じられている固有アイテムでね、ものにするのはたいへんなんだよ～。劉備くんの『一』の宝貝といえば、『雌雄一対剣』だけどねえ。まず宝貝を探索して発見しないといけないし、たとえ所有権を得ても自身の『気』のレベルを限界突破させて体内の『丹田』を開き、英傑自身の『気』と宝貝の『気』を連結しないと能力解放できないんだ～」

「そんな悠長な時間があるか！　レベリング作業中に世界が滅亡してしまうだろうが！」

くそっ、だったら宝貝を所有していなくとも素の能力値が高い英傑のほうが有利じゃないか！　開幕スタートダッシュがすべてと言っていいこの世界では！　能力値オール70台の劉備は、宝貝がなければ凡将だぞ！　ああ、水鏡師匠の道場でわが丹田さえ開いていれば！　たしか師匠からは、俺が丹田を開くには五十年かかるとか言われていたような？　才能なさすぎだろ、俺！　宝貝解放はほぼ絶望的だ……！

「それに、雌雄一対剣には、別に戦闘力とかないしねえ。伝説によるとすごくかっこいい剣らしいけどね♪」

「ふざけるなあああああ！　那波、いいから逃げるぞ！」

「ダメだよアニキ！　みんな、アニキを信じて果敢に戦っているんだよ？　そんな卑劣な真似、俠者のやることじゃないよっ！」

あ、あああ。劉備玄徳、ばんざあああああい！　と村人どもはすっかり盛りあがって、ウッキウキで鋤だの鍬だのを担いで黄巾賊兵たちとの戦闘に突入しているではないか。にっ……逃げづらいっ……強烈にっ……こいつらを見捨てて逃げることに、罪の意識を、感じるっ……！　めめめめ迷惑だ。おおお俺にはたいした能力はないというのに！

「あたしも戦うよおおおお！　燕っ子張飛、ここにありいいい！　みんな、亜人はあたしに任せてっ！」

「おお、張飛さまあああ！」

「か、か、かわいいいいい！」

「お、おっぱいがでかい……！　間違いない！　武力も胸囲も、驚異の99だ！」

はっ？　那波がもう飛びだして亜人と戦いはじめているっ？　す、すさまじい勢いで黄巾賊の兵士たちを吹っ飛ばしている。槍を振るって発生させる風圧だけで……！　まさしく「万人の敵」。でたらめな武力だ。めちゃくちゃ強くなっている！　だが、ええい。張飛に封じられてもやっぱりアホの子だ！　ただの槍では、その亜人の筋肉には通らないのだぞ！　宝貝が必要だ！　まるで知力が上昇していない……！

「つ、つ、強すぎる英傑だんほおお！　し、しかし、気合いで耐えるんほおおお！」
「えーい！　蛇矛がなくても、なんとか……！　クリティカル・ヒットおおお！」
「んほおおお……アッー、いだあああああい！　お尻から血が、血があ！」
「って、ダメだあああああ！　槍が通らないよう？　皮膚を破ったところで、ぽっきり折れちゃったあああああ!?」
「や、や、やばい英傑だんほおおお！　蛇矛をゲットされたら、黄巾賊は全滅だんほおおお！　やむを得ないんほ、者ども！　この張飛を捕らえて斬れっ……！」
「あうっ!?　うわーん、さすがの張飛でも素手じゃこの亜人には敵わないよう……！」
「ああっ、那波いいいいっ？」
黄巾賊の兵士たちが、さらに湧いてきた。こいつら、いったい何人いるんだ？
槍を失ったことが響いた。圧倒的な物量に押されて、那波の身体が泥の中に引き倒されてしまった！　しかも亜人め、那波を斬るつもりだ！
これじゃ、一周目とまるで同じじゃないかあああ！
（那波が黄巾賊に斬られて殺されれば、また時間が戻るのか？　いや待て！　兄として俺は最低なことを考えてしまった！　二度と那波を死なせてたまるか！　それじゃ「死に戻り」じゃなくて「死なせ戻り」ではないか！　そうだ、俺が死ねば、あるいは時間が……）

待てよ？　孔明から「時間を戻す具体的な方法」を俺は聞いていなかった！　「北斗五丈」の発動条件がわからない！　しまった、契約を焦ったことが裏目に……！　俺が死んだからといって時間が戻る保証は、ゼロだ！　もちろん、那波を二度死なせるわけにはいかない！　そもそも、那波が死んだら時間が戻るのかどうかすら、わからないではないか！
くそっ、どうすれば……！
ともかく！「北斗五丈」のことは今考えても無駄だ！　むしろ悪手！　俺自身の力で那波を救う！　たとえ武力70台であろうとも！「気」のレベルも低いが！　それでも、俺は劉備だ。韓玄よりははるかに強くなっている！
「うおおおおおおお！　幽州の義侠・劉備玄徳ここにあり、だあああ！　この苗床亜人野郎！　那波を放せ、この俺と戦えええええ！」
俺は錆びた槍を構えて、亜人のもとへと突進していた。
襲いかかってくる人間の兵士たちは、易々と吹き飛ばすことができた。斬らずとも失神させて戦闘能力を奪い取れる。武力が低いと文句は言ったが、さすがは劉備玄徳！　あの韓玄とは比べものにならない強さだ！　だが……！　こいつら、無限に湧いてくる！　倒しても倒しても続々と現れる！　きりがない！　しかしっ！　全員をぶっ倒すっ！　俺は必ず亜人のもとへと辿り着いて、那波を救いだす……！　ぬおおおおおお！

「ダメだよアニキ！　張飛ですら亜人に敵わないのに、劉備じゃ絶対に無理だよ。逃げてっ！」

「逃げるかっ！　俺は！　那波！　お前を護るために……」

魂を売ったんだぞ！　魂を！

もう、絶対に、あんな光景は……！

「んほおおおおおおおお！　戦闘力はクソザコナメクジよりちょっと高い程度だが、とにかくすごい気合いだんほおおおお！　この程度の武力で、わが部隊を半壊させるとは……！　いずれ封神英傑として覚醒したら、手がつけられないんほおおお！　お前は危険すぎるんほおお！　今のうちに斬ッ！」

俺のもとへと飛び込んできた亜人が、ぶん、と腕を振った。

バキッ！　と鈍い音がして、俺が繰り出した槍は根元から一撃で叩き折られてしまった。

「あ、アニキイイイ!?　やだあああああっ!?」

これまでか……！

俺は――結局、妹を。那波を、護れなかったのか!?

しかし。

「待ちなさい！　黄巾賊に参加している民たちよ、今すぐに武器を捨てて村へと戻りなさい！　亜人に惑わされて漢王朝を崩壊させれば、あなた方もまた生きてはいけなくなるのですよ！　私たちに必要なことは、人間同士で戦うことではない。和することです。この世界をともに護ることです。佞言――断つべし!!」

その、馬上に佇む「少女」は、煌めくような美しい黒髪の持ち主だった。

燃えるような大きな瞳。長い睫。たとえようもなく瑞々しい生命力を全身から放ちながら、自分の身長よりも長い槍を自在に操っていた。あの細腕で、どうやって。「気」を練る術を身につけているのだろうか。

まさか。まさか、この「少女」は。

「英傑名：関羽　統率93　武力98　知力68　政治51　固有スキル・美髪公女」

彼女の頭の後ろに開いているステータスウィンドウが見えた！　女の子が封神されたために少女の姿になってはいるが、やはりそうだ。彼女は、三国志を代表する英雄。人間の武将でありながら、最後まで義兄・劉備玄徳への忠義を貫いて民衆から「神」に祀られた

伝説の存在。「義絶」。「関公」。世界各地の「関帝廟」で、二千年後の未来でもなお人々の心を支える「神」であり続ける存在。俺の故郷の横浜中華街でも、関帝廟に祀られて人々に祈りを捧げられていた関羽雲長だ！　間違いない！

し、しかし、なんて美しいんだ。

あのどこか生き物離れした人工的な美を誇っていた孔明とは、また真逆の美しさだった。赤らめた頬に、瑞々しい肌に、「生命力」が、漲っている。そして、凛々しく、優しい。

あれ？　俺は、この少女を、どこかで――。

「私は在野の放浪武将。まだ関羽の宝貝――赤兎馬も青龍偃月刀も入手できていませんが、盗賊や黄巾賊を相手のソロプレイでそれなりに戦闘経験値は積んでいます。亜人よ。今すぐに賊を解散し、村を立ち去りなさい。それとも、この私と戦いますか？」

黄巾賊に加わっていた人間の兵士たちは、みな、「関羽さま」「関羽さまだ」「美髪の女神さまだ！」「ふつくしい……！」「うおおおおおお！　ＫＡＮＮＵ！　ＫＡＮＮＵ！」「ホワ、ホワアアアアアア！」と感動のあまりわけのわからない奇声を発しながら、武具をいっせいに投げ捨てていた。

「お、お、俺たちは亜人の佞言に、謀られていたんだ」

「そ、そうだ。思いだした。お、俺たち、食うに困って山野を放浪していたら、妙な祠に出くわして」

「祠には『蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし。歳は甲子に在りて、天下大吉』という怪しい予言詩が彫られていた」

「蒼天ってのは、今の王朝のことだ。現王朝の世が滅びるという不吉な予言詩だあ」

「その詩をうっかり読んだとたん、ヘンな妖術にかかって……」

「いつの間にか、黄巾賊の一員に！」

「関羽さま、ありがとうございます！　われらは、村に帰って妻子と暮らします！」

関羽の「佞言断つべし」という一喝が、彼らを操っていた術を解除したらしい。

無限に湧き続けてきたかのようなあの黄巾賊の部隊は、一瞬のうちに解散していた。

た……戦わずして、賊を民に戻してしまったのか？

いくら困窮した流民とはいえ、世界滅亡の危機なのに亜人に従うなんて妙だなとは思っていたが、幻術で操られていたわけか。

「私の特技『一喝』は、悪しき術に操られている人の精神を、状態異常解除できるのです」

すごいな関羽。まさに、美と武の女神と呼ぶにふさわしい！

一人だけ取り残された亜人の大将もまた、関羽に激しく抵抗するのかと思いきや。
関羽がふわり、と優雅に繰り出した槍の一撃を胸板に喰らうと同時に、
「んっ……んほおおおおお～ッ!? う、う、美しい！ な、な、生で見る関羽さまは、美しすぎるうううっ！ オラのようなブサイクな亜人が見ていいお方じゃないっぺええええ！ 目がっ……目がっ……！」
関羽の美しさに心をかき乱されて、なにかブ男のコンプレックスを刺激されたらしく、目を塞ぎながらふらふらと逃げ去っていったのだった。
経験値を積んだ関羽の槍の腕は、とてつもなく強い！ だがそれ以上に、その瑞々しい美貌で心の弱い男をたじろがせてしまうらしい。なにしろ、その武術までもが優雅だった。まるで演舞のようだ。
「うおおおお関羽さま、強えええええええ！」「たった一撃で亜人を蹴散らしたあああ！」「だが、あの亜人は仕留める！」「俺たちの劉備さんを斬ろうとしたやつだ、逃がすなあああ！」と勝ちどきをあげて追撃しようとする村人たちを、関羽は「おやめなさい。戦意なき者を追い打ちするのは、義に反します」と制止していた。
亜人にぶっ倒されて泥塗れになった那波が「あ～ん。うわ～ん。張飛と関羽ってこんなにも扱いが違うわけえ～？ 納得いかなーい」と半べそをかいているが、ともかく那波は

救われた。関羽のおかげだ。礼を言わなければ。
し、しかし、こんなすさまじいまでの「美のオーラ」を放っている美少女に接近してしゃべるというのは、こ、この兄貴道修行に青春を捧げて彼女いない歴十八年を誇る俺には、す、少しばかり荷が重いというか……し、しかも、関羽のこのバストのボリュームはなにごとだ。な、那波と同レベル……！ その上、前方へつんと突き出したロケット形……いいい妹の那波の巨乳にはまだしも慣れているが、たたた他人のこれは……め、目が潰れそうだ！ ああっ、関羽さまっ！ お許しください！
「――あなた方が、劉備玄徳と張飛益徳なのですね。泰山がいつになく激震したので、もしやと立ち寄ってみたら、やはりあなた方が召喚されたのですね……私の馬の脚は遅くて。でも、どうやらぎりぎりで間に合いました。ご無事でよかったです」
うおおお！ あっちから近づいてきた！ この純真無垢な笑顔！ 死ぬ！ 萌え死ぬ！
ぬおっ？ 気づけば、この水城秀一ともあろう者が、後退しているっ!?
「ちょっとアニキ～。なにやってんのさ～。アニキってやっぱり亜人の仲間だったの？ 妹以外の女の子とはろくに口もきけない童貞シスコンってほんと、キモいよね～」
「ええい、うるさい那波！ 妹を護る兄貴道と、彼女を作るリア充道とは両立せんのだ！ だ、だがこんな末期ラオーの如きへたれぶりでは、天下平定など夢のまた夢……！ いい

か那波！　俺がこれ以上後退したら、ためらわずに弩で俺を撃てッ！」
「いやなにもそこまでして巨乳黒髪美少女から逃げなくても。諦めたらそこで三国志終了だよ、アニキ？」
だが、ずんずんと俺に接近してきた関羽が、俺の顔を覗き込みながら突然「ええ～っ!?」とへなへなの声をあげていた。さっきまでの凛々しい関羽の声とは違う。「中の人」の素の声というか。
そして俺は、その声に聞き覚えがあった――。
「に……兄さんっ!?　秀一兄さんなのっ？　兄さんが、劉備玄徳としてこの真世界に来てくれたのっ？　もしかして、ううん、もしかしなくても私を迎えに来てくれたの？」
「って、お前っ？　そ、そ、そうだ、その黒髪！　その睫！　お前、雪乃じゃないかあああ！　す、すっかり、せ、せ、成長して、べ、べ、別人みたいに、そ、その」
特に胸の部分が、とはさすがに言えなかった。
「はいっ！　奇跡的に心臓の手術に成功して、病気が治ったんです！　それからはたくさん食べて、たくさん運動して、お日様の光も浴びて、剣道などもたしなんで、二度と兄さんを悲しませないようにうんと強くなろうってがんばってきたんです！　兄さん！　兄さんのおかげで雪乃は、すっかり健康です！」

「い、いや、その、お前……び、美人になったな……髪はもともと綺麗だったが、肌が別人のように健康的になった」
「はいっ！　ありがとうございますっ！」
おお、なんということだ。
これは「運命」なのか？
関羽として封じられた少女は、八年前のクリスマス・イブの夜に生き別れとなった――俺の「実の妹」。
水城雪乃だったのだ。
いや、今はもう「水城」姓ではなくなっているのか。
「今は、沢渡雪乃、です！」
そ、そうか。だがどうして。なぜ。雪乃が、「真世界」に？
お互いの新しい家族に遠慮していたということもあったが、八年間見つけられなかった雪乃と、どうしてこの真世界で、しかも劉備と関羽という「義兄妹」にお互いに封じられて……!?
「ごめんなさい、兄さん！　すぐに気づけなくて！　兄さん、すっごく背が伸びていたから、近づくまでわからなかったんです！　兄さん、会いたかった……！　うわあああ！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにした雪乃が「ぴょん」と馬から飛び降りてきた。俺はそのまま押し倒されて抱きしめられてしまった。

那波が「あーっ!?」と素っ頓狂な悲鳴をあげているが、俺が慌ててタップしても雪乃は放してくれなかった。胸の谷間に顔が埋まって、い、息ができない……！　死ぬ……！

「胸！　胸を押しつけてるっ！　それ反則だから！　ぶち殺ーす！　アニキっ！　あたしという妹がありながら、よそで別の妹をこっそり囲って浮気していたんだねっ！　信じられないっ！　この糞シスコンッ！　キング・オブ・変態ッ！　妹じゃなくて愛人囲えっ！　それがフツーの男のやることだろうがっオラアッ！」

「な、那波。話がめちゃくちゃになるからちょっとだけフリーズしていてくれ！　俺も、わけがわからんのだ！　雪乃は！　俺の実の妹なのだ！　八年ぶりに再会したのだ！」

えっ実の妹？　と那波が固まってしまった。なんだか複雑そうな表情になっている。しまった。もしかしたら那波は、自分が俺と血の繋がらない「義理」の妹だということを気にしていたのかもしれない。

「……う、うう。兄さん。ごめんなさい……私のことを雪乃だってすぐに気づけなかったのは、きっとこの無駄に膨らんだ胸のせいなんですよね？　体力をつけようといっぱい食べていっぱい牛乳を飲んでいたら、どんどん膨らんでしまったんです。こ、こんな下品な

胸、妹らしくないですよね。妹失格、ですよね……に、兄さんにとっての理想の妹は、もっと胸が慎ましくて身体も幼くないとダメですよね……こんな牛みたいな胸をぶらさげた妹なんて、兄さんの求めるかわいい妹のイメージと違いますよね……妹失格のいやらしい身体になってしまって、ごめんなさい！　わっ私、兄さんがそうしろと言うのなら華佗先生を探して胸を小さくしてもらう手術に挑戦しますから、だからお願い！　嫌いにならないで……！」

「ゆゆゆ雪乃、お前もわけのわからないことを言うんじゃない！　胸の大きさなど、兄と妹の仲に関係あるか！　巨乳だろうがつるぺただろうが、実の妹だろうが義理の妹だろうが、妹は妹だ！　あらゆる妹は等しく妹として兄に全肯定されて護られる存在なのだ、そこにいっさいの差別などないっ！　それが俺の『兄貴道』なのだ！　俺は、妹のためならば神にさえ反逆する、悪魔に魂だって売り飛ばす！『妹』は！　すべてに優先するぜ！」

「えっ？　ほ、ほんとうですか？　う、嬉しいですっ！」

ちょっと照れくさいが、これは、雪乃への言葉であると同時に、那波に向けての妹人権宣言でもあった。那波が、「……ほんと、シスコンなんだからバカ……」と困ったように俺を罵ってくる。いつもの調子を取り戻してくれたらしい。よかった。

「だが！　胸を小さくする手術など俺は断じて認めん！　そんな手術、悪魔の所業だっ！

むろん小さいのもかわいくていいが、おっぱいは大きいほうがいいに決まっている！　巨乳が嫌いな男子などいませんっ！」
「で、でも、妹たる者は胸が薄いほうが妹らしくてかわいいかなって……『妹』という字は、『女未』満と書くんですから……あうう」
「それは杞憂だ雪乃。見ろ、わがもう一人の妹・那波の胸もあんなんだし」
「こらっ、『あんなん』言うな！」
「故に俺の場合、他の兄とは少々違うのだ。むしろ那波のおかげで巨乳妹のほうに慣れているのだ！」
「……それは……よかったです……真世界で新しい妹さんができていたんですね、兄さん……私がいなくなったあとも寂しくなかったんですね。な、那波さんのおかげですね……」
「あ、ああ。まあ……そ、そうだな」
「に、兄さん。私のほうにも、報告しないといけないことが。し、死ぬほど恥ずかしいですが……ええと、そ、その……」
「ん、なんだ？」

「……私、好きな人がいるんです」

お、おう。
そっか。雪乃ももうそういうお年頃なのだな。
よく生きてくれた、よくここまで育ってくれた、兄は嬉しいぞ。
なぜか、胸がきゅんと締めつけられた。
娘を嫁にやる父親の心境って、こんな感じなのかもしれんな。
生真面目で清純な雪乃が好きになったくらいだ、相手はさぞ信用できるやつなのだろう。ちょっと切ないが、ここは兄として妹の成長を祝福して応援してやらねばなるまい！
「そうか。だったら、そいつに再会できるようにがんばらなきゃあな。フッ……」
「いいえ、もう再会できました！　その人は今、私の目の前にいます！」

……えっ？

「わ、私、兄さんが好きなんです。ずっとずっと好きでした。大好きです！　わ、私を兄さんのお嫁さんにしてくださいっ！」

……はい？

「って雪乃？　おおお前、なにを言って？」

おい那波？　呆然としていないで、なにかツッコんでくれ！

「兄さんは、私の大好きなたった一人の兄さんで、同時に私の初恋の人なんです！」

「え、えええええ、俺の生まれてはじめての告白タイムが、ちょ。おま」

「八年間、ずっと兄さんと会いたかったんです！　毎日毎晩、兄さんのことばかり考えていました！　兄さんに会いたい一心でがんばったから病気も克服できたんです！　でも、お母さんたちの手前、直接会いに行くことができなくて……せめてネットで兄さんに接触しようとしたんです。それなのに、Twitter、LINE、Facebook、Mixi、Instagram、どこにも兄さんはいなくて。う、うううっ……！」

そりゃ、どれもやってなかったからな。すまなかった、雪乃……そうと知っていれば……ぽっち兄とか言うなよ那波。

「それで私、閃いたんです！　兄さんは『SANGOKU 大戦争』が大好きだったから、『SANGOKU 大戦争オンライン』のオープンベータテストに参加したら、もしかしたらプ

レイヤー同士として兄さんに会えるかもしれないって！　実はこの世界がゲーム世界ではなくて、しかも天下統一を達成しないと帰還できないと知った時には一瞬途方に暮れましたけれど、いつかきっと兄さんと会えると信じて、誰にも仕えずにずっと在野でソロプレイを続けてきてほんとうによかったです！　ソロプレイを貫いてきたので、真世界の詳しいルールとか、あまりわからないんですけど、そこそこ『気』のレベルはあがりました！　丹田を開けるようになるまでは遠いですが、これからは兄さんのお役に立てます！」

「か、関羽って三国志世界最強レベルの英傑だから、引く手あまただっただろう？　強力な特技『一喝』に加えて、なにやらすごい固有スキル持ちっぽいしな」

「はい！　私の固有スキル『美髪公女』は、この真世界の民の皆さんや商人さんに未来永劫『美と武と商売の女神さま』として尊敬され崇拝され続けるという、時間軸をも超越したチートスキルです！　おかげさまで日々の暮らしには困りません！　しょ、召喚された時にはもう、あ、あちこちに関帝廟を建てられていて、と、等身大フィギュアを飾られちゃっていまして、ちょ、ちょっと照れますけど、もう慣れました！」

「黄巾賊ってもう雪乃一人で解散させられるんじゃないかな……どうして在野でソロプレイなんだよ。天下統一のために誰かに仕えればよかったじゃないか」

「そんなこと言わないでください！　私は！　兄さん以外の、誰にも仕えませんっ！　私

は兄さんから命を与えられました。この真世界で生きる希望までも。私の心も身体もすべて兄さんのものなんです！　私と兄さんは、双子ですよねっ？　同年同月同日に一緒に生まれてきたたった二人の兄妹ですよねっ？」

「あ、ああ。まあ、そうだな……うん。双生児だ。二卵性だから似てないけどな」

だから兄妹なのに俺たちは同い年なのだ。

「だから私、死ぬ時も兄さんと同年同月同日に死のう、って決めているんです！」

「いや、それは違うのではないかっ!?　雪乃お前、俺と無理心中でも図るつもりかっ？」

「そもそも、もしも兄さんと再会しないうちに誰かにお仕えしていっぱい働いて天下を統一に導いてしまったら、兄さんは帰還できなくなっちゃいます！　たとえ会えなくても、きっと兄さんは真世界に来てくださるはず！　私を迎えに来てくれているはず！　だから、絶対に誰にも仕官しなかったんです！　そしてそれは正解でした！　ああ。兄さん。兄さんがきっと私を迎えに来てくれると、信じていました……！」

あ。いや。俺はただ、水鏡師匠に誘われて……というか、どっちかというと那波が誘われたというか……。

「これはもう、時空を超越した『愛』ですね！　ああ、もう……私、我慢できません。兄さん、好き好き！　はむっ！」

「……おわああっ？　なにをするだぁーっ!?　俺とお前は実の兄妹なんだぞ！」

俺は思わず唇と唇の激突を避けて、からくも頬にキスさせていた。押し倒されているので首をずらす以外に回避方法がなかったのだ。恐るべし、シスの誘惑！

「え？　それは元の世界での話でしょう？　この『真世界』では、劉備と関羽は『義理』の兄妹なんですよっ？　つまり、兄さんと私が結婚しても誰にも咎められないんですよ？　ああ……血の繋がりという高い壁をこんな奇跡的なかたちで越えて、兄さんのお嫁さんになれるなんて……素敵……こんなことって……夢が叶いました！」

「封神英傑になったといっても、お互いにもとの世界の身体のままだし、実の兄妹ということになにも変わりはないのでは？」

「いいえ。お互いに真世界という名の異世界に『別人』として召喚されたのですから、転生したも同然！　もう兄さんと私の愛を阻む障害はありません！　これは万分の一の奇跡。神さまが私の願いを叶えてくれたんです。もしも真世界でもういちど兄さんと巡り会えたら、一生分の勇気を出して告白して結婚を申し込もうって決めていたんです！」

「ねえ？　あ……アニキ……こ、この子、絶対おかしいよ！　アニキのシスコンぶりもおかしいと思っていたけれど、この子はブラコンの冥府魔道に堕ちてるよう！」

俺の貞操の危機を前についに堪えかねて口を開いた那波が、ドン引きして雪乃を指さし

ている。

俺も同感だが、俺だって雪乃と離れ離れになったためにシスコンをこじらせたわけで、雪乃の気持ちは半分くらいはわかる。初恋とか結婚といった世迷い言はさっぱりわからんが。

そうだ。俺には那波という妹が七年間ずっと一緒にいてくれたのに対して、どうやら雪乃は違ったらしい。雪乃の新しい家族の中に、新しい「兄」はいなかったのだ。こんな文字通りのデスゲーム世界でずっとソロプレイを続けられるくらいだから、おそらく一人っ子だったのだろう。

ああ。失われた八年間、俺と雪乃が一緒に兄妹として暮らしていれば、雪乃もこんな常軌を逸したブラコンには……そもそも雪乃は生真面目で純真で善良で常識人なんだし……そんな雪乃の本質がまるで変わっていないことは、「関羽」として凛々しく振る舞っていた時の雪乃の姿で証明済みだ。唐突に俺に再会してしまったために、今は一時的に混乱してブラコン暴走状態になっているのだ。八年分の熟成されたカルマが一気に暴発しているのだ。

ああっ、なぜこんなになるまで雪乃を放置しておいたんだ！　バカだ、俺は！

「兄貴道」、道険し……！

ちょっとだけ目の前が暗くなった。関羽の女神補正と劉備の人徳補正がかかっている村人たちと、スットコドッコイのヒョロ眼鏡は、「さすが劉備三兄妹、熱い兄妹愛だああ！」「いやあ～いっそ清々しいほど仲がいいねえ～」とageageだが、俺を見る那波の視線がまるで養豚場の豚を見るような冷たいものになっている。

「……ケッ。こここの妹萌え豚が。いいい妹だったら誰でも萌えるのかよ……じじじ実の妹相手に、なにやってんのさ……ゆゆゆ許せない……ななな七年間も、あたしの気持ちを弄んで……ぐぬ、ぐぬぬぬぬ」

い、いかん。よくわからんが、いやまあわからんでもないが、本気で怒っている。ぬおっ、那波の背後にすさまじい「嫉妬」の炎が？　那波のステータスウィンドウがメラメラと燃えている！　「武力99」の嫉妬ッ……！　あっ。槍を手に取った。まずい！

「……私と兄さんの感動の再会を邪魔しないでいただけますか、そこの新米妹さん？」

「新米じゃない！　七年間、アニキと同居していますぅ～！　何度も一緒にお風呂に入ってますぅ～！　髪の毛を洗ってもらったこともありますぅ～！　トイレのドアを開かれて恥ずかしい姿をばっちり見られちゃったこともありますぅ～！　それに、戸籍上もちゃんと兄妹ですぅ～！」

な、那波？　一緒にお風呂っていったい何年前の話だ？　ここ数年は、俺のパンツと自

分の下着を一緒に洗うな、俺の臭いが移る、とあらぶっていたくせに？

「なんですって？　真世界で義兄妹になったんじゃなかったんですか？　七年間同居っ？　お風呂っ？　おトイレ？　か、か、髪の毛を洗ってもらって……？　う、う、う、うらやま……兄さん！　私というものがありながら、こんなリア充臭くてギャル臭い妹を勝手に家に引っ張り込んでいちゃいちゃ爛れた兄妹ライフを楽しんでいたんですね！　わわわ私以外の妹に劣情を催すなんてありえません裏切り行為です。この子の巨乳にずっと興奮していたんですね！　だから私の病弱キャライメージにぜんぜん似合わない膨らんだ胸をあっさりと受け入れて……兄さんはいやらしいです、不純です！」

「ふーんだ。あたしはアニキに添い寝してもらったことが何度もありますう～！　雷が鳴った夜とかぁ、怖い夢を見た夜とかぁ」

「わ、わ、私だって、熱を出して寝込んでいた時に兄さんに徹夜で看病してもらったことが……！　ね、ね、寝汗を拭いてもらってばんざいポーズ取らされてパジャマを着替えさせてもらったことも……！」

「あたしなんて、遊園地のジェットコースターでお漏らししてパンツ穿き替えさせてもらったことまであるよっ！」

「お前たちはいったいなにを口走っているんだあああ!?」

すわ、関羽と張飛の激突不可避!?　下手したら相打ちで二人とも……!?

俺は、慌てて雪乃と那波に提案していた。

「那波！　雪乃！　俺たちはこれから兄妹として三人仲良くこの三国志世界を生き抜かねばならんのだ！　劉備、関羽、張飛が揃ったんだから、三人で義兄妹の契りを正式に結ぼう！『桃園の誓い』をやるぞ！」

「えっ？　は、はいっ！　わかりました兄さん！　この世界には、封神英傑同士で義兄妹の絆を結べるシステムがあるんですよ！　もちろん枠は真っ新なまま空けてあります！　兄さんに捧げる『処女枠』です！」

「ええ～。この頭おかしいブラコン女と義姉妹にぃ？」

強制停戦、そして和睦。雪乃と那波を仲良くさせるには、もう、これしかなかった。

※

――というわけで、「村の危機をお救いくださって」「ありがたやありがたや」と村人たちが桃園で宴を開いてくれたのだ。

むろん「桃園の誓い」イベントなので、出席者は俺と雪乃と那波の三人だけである。

いやあ、満漢全席、机の上に並んだ心づくしの料理の数々……。

「ってアニキ。村人さんたちには感謝してるけどさ、なんだか料理の味が薄いよう。調理の仕方が素朴すぎぃ！　見た目も、素材剝き出しィ！　あーん！　中華街が恋し～い！」

那波はさっそく本音を漏らしていた。こいつはソフトボール部の練習で大量のカロリーを消耗するから、腹ぺこを満たすために中華街に日参していたグルメっ子なのだ。特に、江戸清の豚まんな。

「この真世界の文明は、私たちの世界で言えばおおむね紀元二世紀レベルですからね。四川料理も広東料理もまだ存在しないんですよ。スパイスたっぷりの現代料理と比べると味気ないですが、そのうち慣れちゃいますよ。村人の皆さんに感謝していただきましょう。はむはむ」

雪乃は幼い頃から粗食だったから、順応できているらしい。でも量は食べるようになったんだな。あの、満足に食事を取る体力もなかった雪乃が……兄さんは嬉しいぞ……！　これだけ食べられるようになったから、胸も膨らんだのだな。納得だ。箸の使い方も相変わらずお上品だ。

那波は骨付き肉を手づかみか……まあ、これはこれでいかにも那波らしい。

「と、とにかくさっきまでの争いは水に流して、桃園の誓いを結ぶこととするぞ！　俺た

ちは今日から、この真世界でも兄妹だ！」

「関羽役がぁ～ちょっと頭おかしいブラコン女だけど～」

「おかしくないですっ！　さ、さっきは少々取り乱しましたが、私は学校では風紀委員長から生徒会長へとクラスアップしたくらいにきっちりとした優等生女子ですからっ！　この真世界では庶民さんや商人さんに崇拝される女神さまですしっ！　い、いろいろはしたないことを言いましたが、わ、忘れてください、兄さん……あうう」

そ、そうだな。実の兄に恋心を告白とか結婚を迫るとか、喜びのあまりテンパってたんだな。もう忘れよう雪乃。

「……ひ、人前では、ですよ？　私の気持ちを見て見ぬ振りはやめてくださいよ兄さん？　勇気を振り絞って告白したのに、冷たくされたら泣いちゃいます……これからは公式の場では『兄上』、内輪では『兄さん』、そしてベッドの中では『雪乃だけのお兄ちゃん』と呼んでいいですか？」

「そこっ！　ベッドの中って、なんなのよっ？　いい歳して兄と一緒に寝る妹なんていないってば！　絶対あんた頭おかしいよ！」

「那波さん？　私だって、兄さんが大好きな『SANGOKU 大戦争』の新作がリリースされるたびに徹底攻略して三国志に詳しくなったんですよ。邢道栄とか十万回くらい斬りま

した。歴史書として書かれた正史・三国志にだって、劉備と関羽・張飛の仲はとっても親しくて、主従一緒に同じ寝床で眠っていたって、ちゃんと書いてありますから！」

いや、それは単に戦陣で野郎同士雑魚寝していただけではないのか？

「け、邢道栄？　うっ、頭が……」

「そのキャラのことは決して考えるな那波！」

「とにかく、千八百年の昔から関羽は劉備と一緒に寝ると決まっているんです！　これは動かしがたい歴史的事実なんですっ！　せ、せ、正史だと、男同士なのに一緒に寝ていたんですよ？　はうう……し、信じられませんが、それだけお互いの情愛が深かったということですよね？　ましてや私と兄さんは、女と男ですから、同衾して当然……もちろん、男女ですから、添い寝以上の関係だって……！」

「あーっ！　劉備と関羽・張飛は、そういう腐女子的な関係じゃないからっ！　一瞬『SANGOKU 大戦争』のキャラデザで想像しちゃったじゃんっ、やめてよーっ！」

雪乃から「義兄妹」の絆を登録する方法を聞き出そうとしているのに、この二人、料理を食べながらまたしても言い争いを再開してしまった。

「那波さん！　私は生まれつき心臓に病気を抱えて、毎日毎日生きるのが苦しくて、こんなに日々が辛いのならもう楽になりたいな……なんて弱気になって泣いてばかりだったんです。でも、兄さんが！　恥ずかしがり屋だった兄さんが、東京の病院へ転院していく夜に、私を追いかけてきてくれて……！　『俺は――いつかきっとお前を護れる兄になる！　必要ならば天才ドクターにだって、世界を救う英雄にだって、俺はなるから！　お前に、約束する――！』って大声で叫んでくれたんです！　誓ってくれたんです！　車の窓ガラス越しにも、兄さんのその声ははっきりと耳に届きました！　だから私はがんばって生きることができたんです！　兄さんが、私に勇気を与えてくれたんです！　兄さんは、私だけの兄さんなんですっ！」

ええっ？　ぜ、全部聞こえていたのかあっ？　やめろーっ雪乃、それは俺の黒歴史だあああ！　まさにあの時こそは、内気だった俺が中二病キャラになってしまったあげく、シスコンを発動してしまった決定的瞬間……！

「なに言ってんの？　どこかで記憶を捏造してるんだよ、それ！　だってその台詞は、アニキがあたしに言ってくれた台詞じゃん！　あたしの家はみんなすごく不仲で。どこにもあたしの居場所なんてなくて。結局両親がごちゃごちゃになって家族がバラバラになって、いきなりお父さんたちと引き離されて知らない土地の知らないマンションに連れてこられて泣いていたあたしに、アニキが笑って約束してくれたんだよ！　『この俺がお前を、兄として護ってやる！　必要ならば天才シェフにだって、世界を救う英雄にだって、なんに

だってなってやるとお前に約束する！』ってさ！　だから、あたしは――アニキから、あたしの居場所をはじめて与えられたんだ――」

な、那波？　お、お前、そんなにもあの俺の言葉を……お前ってやつは、まったくツンデレだな……って、おい？　待て、これはまずい！

「……那波さん……？　もしかして……ほぼ同じ台詞ですね。コピペ流用ですね……？」

「……アニキ……これ、どういうこと……？　まさかさあ……どどどどの妹にも同じ『殺し文句』を使っていたわけ……？　信じられないっ！　どこからコピペしてきたのさっ！」

「きききききっと、十八禁の妹エロゲーで妹とのフラグが立つシーンからの引用ですよ！に、に、兄さん。最低です……！」

いやっ！　そうじゃない！　コピペというわけではないっ！　誤解だ誤解なんだ！

「たしかに俺は、自力で中二病台詞を生みだす才能に乏しい。だからオマージュや引用が多いが、俺自身のほんとうの気持ちを伝えてくれる言葉を厳選している！　それに、二人に誓った約束の言葉は自分で紡いだ！　実妹だろうが義理の妹だろうが、妹は妹だ！　雪乃も！　那波も！　等しく俺の妹なんだ！　だから、等しく同じ約束を誓ったのだ！　言っただろう？　あらゆる妹は等しく妹として兄に全肯定されて護られる存在なのだ、そこにいっさいの差別などないっ！　それが俺の『兄貴道』なのだ！　俺は、妹のためならば

神にさえ反逆する、悪魔に魂だって売り飛ばす！　『妹』は！　すべてに優先するぜ！」

フッ……決まった……！　なんとか言い逃れた……！

「うっせーいっぺん三度死ね！　その『妹はすべてに優先するぜ！』という決め台詞が、すでにシスコン御用達の深夜アニメ『戦国妹コレクション』の改変パクリだろーが！」

し、しまった？　バレていたとは⁉　な、那波。お前あんな、主人公が女の子なのになぜか常軌を逸したシスコンという、頭の沸騰したアニメを……お兄ちゃんはお前をそんな妹に育てた覚えはないぞ！

「こんの～、腐れシスコンが！　あたしと雪乃ちゃんの美しい記憶を、あの感動を返せ～！　豚まんの具にするぞおらぁ！」

「二人の幼い妹の心を弄んで……許せません！　那波ちゃんは兄さんの正式な家族ですから『妹』として『認知』してあげますが、これ以上妹を増やすことは絶対に認めませんからね！　いいですね、兄さんっ！」

なぜ俺が袋だたきにされねばならんのだ。ま、まあ、雪乃と那波が共同戦線を張って結託したから、これでいいのか……そうだ。俺を憎め。憎むがいい。そうして姉妹の絆を深めるがよい、すべては俺の計算通りだフハハハ！　あ、痛い痛い。那波さん。飛びつき逆十字はやめてくださいお兄ちゃんの靭帯をつば九郎に捧げないでください。

ああ、「兄貴道」、道険し！

「いいから『桃園の誓い』の台詞を三人で唱えるのだ！『SANGOKU大戦争』バージョンで行くぞ。那波、暗唱できるな？」

「ごまかされてる気がするけどぉ。一万回イベントムービー再生したからだいじょうぶ！」

「はいっ、私も毎日暗唱しています！」

「「われら三人、兄妹の契りを結びしからは、心を合わせてともに助け合わん。同年同月同日に生まれることを得ずとも、同年同月同日に死せん事を願わん！」」

まあ私は兄さんと同年同月同日に生まれたんですけどね、同じ子宮内から同じ産道を通って押し合いへし合いしながら仲良く生まれてきたんですよね、うふふ、えへへ、と雪乃はまたヘンな妄想をはじめて頬を赤らめている。幼い頃から肌の白い子だったが、興奮するとマジで真っ赤になるのな。なんとなくクリオネっぽい。そういえばクリオネの捕食シーンって……。

「おー。『桃園の誓い』イベントの言霊、すっげー！　ドーパミンじゅわーって出た～！　なんだか、ほんとに運命の三兄妹がついに揃った！　って気分になってきて盛りあがって

きたあ～！　そっか。雪乃ちゃんはアニキの双子の妹だから、あたしが末の妹になるのかあ。やったね那波ちゃん！　お姉ちゃんができたよ！」

やはり那波は単純だな。チョロシスだ。ほれ、餌をくれてやろう。饅頭を食え。

「兄さん。那波ちゃん。私は兄さんが望むのならば、天下統一のためにこの武と命を捧げます！　私、関羽雲長に封じられて、とっても強くなれて、ほんとうに嬉しいです……！　これからは、私が兄さんをお護りいたしますね！　がんばって青龍偃月刀を探します！」

雪乃も、ようやく沸騰していた脳が沈静化して、もとの凜々しい雪乃に戻ってくれた。一時は雪乃のキャラ崩壊が止まらなくなってどうなることかと焦ったが、やはり状態異常が解けた雪乃は清楚な王道美少女だ。美しく、凜々しく、そして優しい妹だ。よかった。

うん？　待てよ？

（もしかして、この「桃園の誓い」は――孔明が言っていた「運命強制イベント」なのではないか？）

正史でも演義でも、劉備三兄弟の「運命」は悲劇に終わる。同年同月同日に死なんという願いは、果たされないのだ。最初に関羽が同盟国の「呉」に裏切られて殺され、関羽の復讐を誓った張飛も暗殺されるのだ。

一人残された劉備は、一介の筵売りから蜀漢帝国の皇帝にまで成り上がり、民たちから

「漢帝国を復興してくれる救世主」と期待されていながら、漢を簒奪しようとしていた真の敵・曹操との戦いを投げだして、弟たちを殺した呉へと無謀な復讐戦を挑む。あの「義侠」劉備が、この時ばかりは暴君と化した。呉への遠征に反対した者は次々と投獄した。宰相の孔明ですら、止められなかった。劉備は皇帝の座も漢王朝を復興するという使命もなにもかも捨てて、弟二人の仇を討とうとしたんだ。大義名分よりも天下よりも、関羽と張飛との絆こそが、劉備にとっては……劉備は「情」の人として、生きた。戦った……そして……退路を捨てて敵陣深くまで突き進み、敵領土内に長々と陣を築くという歴戦の野戦将軍劉備らしくもない愚策を採って、遠征軍は全滅した。蜀を支える何万人もの将兵が、死んだ……漢王朝はその瞬間に、終わったと言っていい。劉備は失意のうちに病没し、後事を託された孔明は、完全に崩壊したに等しい蜀を立て直して滅亡の危機から護るので精一杯だった。その蜀も結局は、ただ一人で劉備たちの「夢」を背負い込んで戦い続けた孔明が五丈原の戦場で過労死するとともに、終わった……蜀も、漢も、滅びた……。

（もしもこの「桃園の誓い」イベントが、劉備三兄弟の「運命」フラグの第一歩なのだとしたら……雪乃と那波には、孔明が言ったように、いずれ関羽と張飛の「運命」が降りかかってくるのかもしれない！）

俺は、青ざめながら「誓い」の言葉に新たな一文を追加していた。

「那波。雪乃。桃園の誓いの言葉に、一言付け足すぞ。これは兄としての絶対命令だ！ 反論は許さん、背くことも許さん！ 『妹たる者は、兄よりも先に死ぬな』――いいな？」

こんな言葉だけで「運命」を回避できるほど真世界はきっと甘くはない。だが、那波も雪乃も、関羽と張飛の「最期」は知っている。真顔になって、こくりとうなずいてくれた。

「はいっ、わかりました！ 決して、兄さんを悲しませません！ 私は、生きます！ 泥水をすすってでも、生きて、生きて、生き抜きます！」

「あたしが弱っちぃアニキより先に死ぬわけないじゃーん！ 武力99だよ？ 蛇矛さえ使えるようになれば、一人で一万人の敵と戦えるんだから！ まっかせて～！」

「これでほんとうにお互いの命を護り合う姉妹ね。兄さんのために、仲良くがんばりましょうね。公の場ではお互いに英傑名で呼び合うのがこの真世界のマナーだけれど、プライベートでは『ななちゃん』って呼んでいい？」

「いいよー！ あたしはじゃあ、姉妹水入らずの場面では『ゆきのん』って呼ぶねー！」

うむ。ちょっとばかり不吉な予感が胸をよぎったが、「SANGOKU大戦争」で何度も見てきた、そしてそのたびに涙してきた劉備三兄弟の「運命」を雪乃と那波が意識したことによって、ここに三人の絆は固まったと言っていい。ついさっきまであんなにいがみあっていた妹と妹が……これもすべてこの俺の計画通りだ！ フハハ！

「で、真世界のシステム上で『義兄妹』の絆を結ぶにはどうすればいいのだ、雪乃？」

「はい、兄さん！ ステータスウィンドウ上の『英傑名』アイコンをタッチすると、サブウィンドウが開きます。その中に『義兄妹』コマンドがありますから、義兄妹に選んだ相手にそのコマンドを指でタッチしてもらいます。どちらか一方側で登録すれば、自動的にもう一方でも登録されます。簡単ですよ♪」

なるほど。さっそく俺のステータスウィンドウを開いて、「義兄妹」コマンドを表示してみた。那波が「妹枠一番手、イッタダキー！」と人差し指を突き立て、雪乃が「ああっ酷い！ 兄さんのたいせつな『処女枠』が……！」と頬を赤らめながら続いて登録した。

俺のステータスウィンドウが広がり、「義」というアイコンがついた那波と雪乃のバストアップ写真が浮かびあがっていた。雪乃はお見合い写真かよ！ と突っ込みたくなるようなお澄まし顔だ。那波が写真の中で豚まんを食っているのはなぜだろう。

「これで兄さんとの間の絆登録作業は完了です。次は、ななちゃんと私の間でも絆を結びますね。はいっ！ これで三人は正式に『劉備三兄妹』です！」

「あっ？ 『気』のレベルがいきなりあがったよ？ すっごい！ これって義兄妹を作ったボーナス特典だねっ！」

「はい、そうです。あと、義兄妹の絆を結んだ武将同士で一緒に戦うと、戦術ボーナスな

どもつくそうです。ちなみに、義兄妹情報を選択ロックして任意の妹を『シークレット妹』にすることもできますよ♪」

「とはいえ、宝貝解放まではまだ遠いな……丹田を開くには、義兄妹をもっと増やせばいいのか？」

「ダメだよアニキ、妹を増やすのは禁止っ！　劉備・関羽・張飛は三兄妹というのがお約束なんだよ？」

「義兄妹の絆は、最大三人とまで結べますから、あと一枠だけ空いています。けれど、あと一人程度のボーナスをもらっても限界突破・宝貝解放には程遠いですよ、兄さん？」

「そうなのか。どうすればがっつり『気』を稼げるんだ？」

「す、すみません。ずっと在野でソロプレイでしたから、効率よく『気』を稼ぐ方法とか知らないんです。うう」

「いや雪乃、お前の責任じゃない。これから対策を考えよう」

劉備は、素の能力値はぱっとしない。一般兵相手なら無双できるとはいえ、宝貝を解放できないと対英傑戦闘や対亜人戦闘では微妙な武将だし、関羽の青龍偃月刀と張飛の蛇矛は二人が戦場で戦うために必要だろう。

「あ。兄さん。ステータスウィンドウは閉じておけますよ？」

「そっか。じゃあ、普段は閉じておこう」

「あーそうだ！　ねえ、ゆきのん？　あたしの固有スキル『燕人小妹』がどーゆー能力なのか意味不明なんだけどぉ、どうすれば固有スキルの効果を調べられるのかなあ？」

「ああ。それでしたら固有スキル名のアイコンを指でタッチすると、解説ウィンドウが開きますよ」

「ありがとー！　やっぱりお姉ちゃんって頼りになるねえ、アニキ！　お姉ちゃんもいいもんだなあ～♪」

那波の固有スキル「燕人小妹」はあの張飛のスキルなのだから、絶対に武芸に関連するスキルだろう。たぶん、戦闘時に一定時間クリティカル率をアップとか、武力を数十パーセントアップとか、そういう「一撃必殺系」だろう。

だが、意外なことに――。

「え、ええ～？　『燕人小妹』は、お料理スキルうううう？　野戦料理を美味しく調理するために、そのへんの雑草やありふれた調味料を、大陸では滅多に手に入らない貴重な香辛料に『変換』することができるスキルうう？　なにこれっ？　戦闘と関係ないじゃーんっ!?　うわーん！　蛇矛もないし、あたし、ただの脳筋武将だよう！　女神さまスキル持ちの関羽と、お料理スキルの張飛。どこで差がついたのさぁ!?　慢心、おっぱいの違

い？　で、でも、あたしのほうが、ゆきのんよりちょっとだけおっぱい大きいはずだしぃ！」
「それは聞き捨てなりませんねななちゃん。私のほうが大きいですよ？　だって、兄さんが巨乳の妹を好まれておられるんですから！　従って、私の兄さん愛のほうがコンマ数ミリ上回っているはずです。脱いで比べっこしましょうか？」
「こらっゆきのん、アニキがいるところで脱ぐなっ！　油断も隙もないんだからあ！」
「ぐわっ、バルス！　……目が……目が……」
「ああっ兄さん、ごめんなさい！　胸の下半分を見ただけでこれじゃ、全部脱いだら兄さんの目がたいへんなことに……でも、だいじょうぶです！　これは兄さんが清純な殿方だという証ですから！　少しずつ慣らしましょう！　兄妹愛さえあれば乗り越えられます！　そうですね、毎日一ミリくらいずつ露出度をあげていけば……わ、私の胸の成長速度は七日で一ミリほどですから、いずれ追いつきます！」
「忍者の修行じゃないんだぞ、雪乃。というか、妹の生乳を喜んで見る兄などいない！」
「……え……えええっ？　や……やっぱり……つるぺたが、好きなんですか……？　あ、あ、あうあう……だったら私、華佗先生を探して、胸を小さくする手術を」
「違うそうじゃない！」
「はっ？　着衣状態が好きだということですね、了解いたしましたっ！　巨乳の女の子っ

て、ぴっちりした服を着込むとかえって胸の盛りあがりが強調されて想像力が膨らみますものね。兄さんって、着衣フェチなんですね。か、かわいいです……」
「え、ええ？　そうだったの？　あたし、家の中じゃアニキの前でもノーブラTシャツ姿でゴロゴロしちゃってたよう？　うわあああん、内心実はフェチ的に喜んでただなんて！　アニキのガチ変態！　リビドー直結型外道シスコン！」
「違うっ！　な、那波のノーブラTシャツ姿はたしかにどうかと思うが……と、特に白地のシャツはまずいな。最近のウニクロのシャツは生地が薄いし、見えてはならない部分が透けて見えることが……正直あれは、目のやり場に困……げふんげふん」
「なにも違ってないじゃんっ！　見えてたなら早く言えっこの変態っ！」
　話を戻せば、那波の固有スキルは「道端の雑草とか安い調味料とかを高価な香辛料に変える」という、およそ三国志と関係なさそうなものだった。なんだこれは？　たまげたなぁ。「道栄即斬」に比べればはるかにマシだが……肉とか米を錬成できるならともかく、香辛料だけでは、腹が膨れないではないか。
「兄さん、ななちゃん？　これってもしかして、真世界の素朴な味付けでいまいち美味しくないお料理を、二十一世紀レベルの美味しいお料理に変えることができる神スキルなのでは？　中華街風の味付けもできますよ！　たとえば木の実を唐辛子に変換すれば、真世

界に存在しない四川料理のできあがりです！　真世界では、香辛料は希少品なんです！
なにしろ唐辛子なんて、大陸に存在すらしませんから」
　なるほど！　そうだ！　閃いたぞ！　那波と雪乃。二人を正史英傑の「運命」から離脱させて、しかも天下統一というデスゲームの目的は遂行できるという、一挙両得の秘策を！　フハハハハ！　やはり俺は天才だーっ！
「那波！　雪乃！　俺たちはこれから食堂を経営するぞ！」
「「食堂!?」」
「そうだ、食堂だ！　名付けて『関張飯店』！　劉備、関羽、張飛。この三人の武をもってしても天下は盗れなかった。それはすでに正史が証明済みだ！　しかも、俺たち三人の『気』のレベルはまだ低く、丹田を開いて宝貝を解放するには程遠い。この真世界での天下統一デスゲームは、短期決戦。開幕スタートダッシュがすべてと言っていい。正史では数十年の余裕があったから、大器晩成型の劉備も終盤戦でぎりぎり天下争奪レースに追いつけたわけだが、この世界の猶予は数年しかない。ならば武の力で勝ち抜こうにも、俺たちはあまりにも不利すぎる」
「ええ、さっぱりわかんないよアニキ～？　つまり、どういうことだってばさぁ？」
　はっ？　もしかして「商人ルート」選択ですか兄さん？　漢の蕭何になるのですね！

さすがです、兄さん！　と雪乃が目を潤ませながらうなずいた。やはり雪乃は地頭は抜群にいいのだ。俺のことになると頭が沸騰して一時的に理性が吹っ飛ぶという欠点はあるが、学校で生徒会長を務めていただけのことはある。
「そうだ雪乃。俺には、民に無駄に慕われる人徳スキルがある。お前には、民や商人に崇拝され信仰される女神スキル。そしてなによりも那波には、この世界では手に入らない高級な香辛料をいくらでも錬成できるチートスキルがある！　俺と雪乃とでまずは商人たちから銭をかき集めて食堂を開き、客を呼び込むのだ。いったん呼び込んでしまえば、あとは那波が作った二十一世紀の本格中華料理を提供できる！　この真世界の人間は、唐辛子という悪魔じみた中毒性を誇る香辛料を知らない！　たちまち、ブラックカレーを口にしたかのように悶絶してカプサイシン中毒になるだろう！　麻婆豆腐とか、きっと神の料理扱いだぞ！　しかも香辛料をタダ同然で錬成できるのだから、原材料費は激安！　唐辛子は俺たちが独占しているから競争相手もいない！　ぼろ儲けだっ！　かくして一号店で稼いだ金と信用を元手にさらに金を借り、一気に『関張飯店』のチェーン店展開を開始して大陸全土に支店を広げるのだッ！」
　唐辛子の発汗作用は、健康増進にもなるしな。ウィン＝ウィンだ。
「お、おおおお？　アニキ、すごいじゃんっ？　それ、いけるよ！　どうしたの急に？

あたし、お料理のレシピはいろいろ覚えてるから、手に入らない香辛料を錬成できればなんでも作れるよっ！」

「まあ、ネット小説で覚えた手だがな。異世界では料理で無双できる――これは全宇宙普遍の基本ルールだ！　かくして、俺たちは一年以内に大商人になれる！　最短コースで！」

「豊富な経済力を確保して、天下統一にもっとも近い封神英傑に『商人』としてお仕えし、英傑に軍資金と兵糧を補給し続けて後方から支えるというわけですね、兄さん！　楚漢争覇でも、漢の劉邦に勝利をもたらした最大の功臣は、常に後方からの補給線を途切れさせずに漢軍を支え続けた蕭何でしたからね！　ああ、私の兄さんはこんなにも頭のいい人だったんですね……！　しかも、私たち妹を戦わせずに護りながら天下統一を果たそうとされておられるのですね！　お優しいです。妹への愛に溢れています。さすがです兄さん！」

「いやいや。はっはっは。いやなに、兄として当然のことだ。そういう雪乃もずいぶん古代中国史に詳しいな」

「はいっ！　『春秋左氏伝』とか読んでますから！　兄さんがお好きかと思って！」

よ、読んだことないな、それは。雪乃が俺を尊敬する視線が痛いので、黙っていよう。

「あたしも『キングダム』読んでるよう！　あれでしょ。キョロちゃんみたいなもこもこの着ぐるみを着たらあたしみたいな低知力キャラでも軍師になれるんでしょ？」

そんなわけあるか。あれは「もっと女の子キャラを出してください」という編集者のテコ入れ指示だ。そのせいで「お前、女だったのかー」展開ばかりではないか。

とにかく、俺は那波も雪乃も、危険な戦争には関わらせたくない！　宝貝を解放できそうにない現状ではなおさらだ！　武将として正史ルートを辿れば、期せずして「運命」フラグが立ってしまう恐れもある！

だが孔明との契約もあるし、「時間切れ」が迫っている以上、決して傍観は許されない。

だからこその、敢えての商人ルート選択なのだ！

この真世界大陸は、正史の中国大陸と同等の広さを持っているようだ。ならば、戦争でもっとも重要なもの、それは補給なのだ！　あの稀代の天才軍師・孔明ですら、正史では蜀の険しい桟道に阻まれて補給に苦労し、ついに中原に出ることができなかった。あれほどの才能に満ちた、あいつが、だ……。故に、俺は商人ルートを採って「天下統一」できそうな封神英傑の兵站を維持すべく働く。この戦略は、統一のために間違いなく有効だ！

「『妹』はすべてに優先するぜっ！　那波。雪乃。俺たちは、迷わず最短コースを行くぞ！」

「「おーっ！」」

――かくして、俺たちの「関張飯店」一号店が泰山麓の村にオープンしたのである。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！

©Mikage Kasuga, Won 2018